

厚生労働省 平成21年度障害者保健福祉推進事業

障害のある人の実演芸術「パフォーマンスアーツ」に  
関する調査研究事業  
活動報告書

障害のある人の実演芸術「パフォーマンスアーツ」に関する調査研究会

## <目次>

### 0. はじめに

#### 1. 総論 交響する福祉へー「アウトサイダーライブ」の萌芽から

研究会座長 小暮宣雄(京都橘大学)

### 2. 研究経過

#### 1. 研究目的

#### 2. 調査研究の実施方法と経過

### 3. 調査研究

#### 調査の概要

##### 1. 調査の目的

##### 2. 実施時期

#### 分析と考察

##### 1. 悉皆調査結果について

##### 2. 設立目的・経過／追跡取材事例

##### 3. 残される課題として

### 4. 追跡調査

#### (1)Dance&People

#### (2)NPO 法人さをりひろば「キンキ雑楽団」

#### (3)「ドンマイ音楽サークル」滋賀県立八日市養護学校の卒業生が中心サークル活動

#### (4)社会福祉法人育夢(はぐくむ)「糸おかし」

#### (5)社会福祉法人上牧町社会福祉協議会「遊びに行こう」

#### (6)大阪市旭区社会福祉協議会ボランティアビューロー 視覚障害者ダンスサークル「アイ」

#### (7)社会福祉法人かがやき神戸「ぐりいと」

#### (8)社会福祉法人ポポロの風 里の風「劇団ドロップ」

### 5. 公開研究会 「アーツというツールで支援のいない場を作ってみよう！」

#### 現場レポート

西川真樹(本企画運営スタッフ)

#### ワークショップ&ライブ 体験コラムその1

久保田翠(NPO 法人クリエイティブサポートレッツ 理事長)

#### ワークショップ&ライブ 体験コラムその2

山本佳美(NPO 法人ちば MD エコネット 事務局長)

### 6. まとめ

## はじめに

本書は厚生労働省の平成21年度障害者保健福祉推進事業の助成を受け、『障害のある人の実演芸術「パフォーミングアーツ」に関する調査研究事業』として、一年間取り組んでまいりました調査研究の成果物として、編集されたものです。

平成20年度、滋賀県では「第8回全国障害者芸術・文化祭滋賀大会 アートはボーダレス」を年間通して開催いたしました。その事業の一環として全国から絵画や陶芸などの作品を公募し、記念図録集としてまとめ上げました。その編集過程において、障害のある人たち表現活動が、公募された絵画や陶芸などいわゆる視覚芸術（ビジュアルアーツ）だけではなく、ダンスや音楽などの舞台等で表現する実演芸術（パフォーミングアーツ）のジャンルも行われていることから、図録集の別冊として『アウトサイダーライブ』という冊子を、ライブ系の表現活動の事例紹介をメインとして作成しました。

今回は、既存の演劇やパフォーマンスを超えた新しい表現を通して「障害」の枠を超えて評価され始めている障害のある人たちの舞台等での表現活動「アウトサイダーライブ（ライブ系表現活動）」について、近畿圏域での悉皆調査を始め、追跡調査を交えて、これらの活動に対しての今後の可能性について研究を行うことといたしました。

また、2月には滋賀県大津市において開催されました「アメニティー・ネットワーク・フォーラム」との同時開催企画として、パフォーミング・アート・ライブ「アートというツールを使って、支援のいない空間を作ってみよう！」と題し、公開研究会、ワークショップ、そして実際に即興のパフォーマンスを披露し、ライブ系の表現活動について考える時間と空間を作り、参加された人たちと障害のある人たちの表現活動についての意見交換を行いました。

研究員には、『アウトサイダーライブ』の編集メンバーに加え、千葉、静岡で地域でのアート活動を実践されている方から、大学院の研究員にも参画していただき、幅広い議論を行うことができました。

最後に、当事業に対して、助成いただきました厚生労働省に感謝申し上げますと共に、ご協力いただきました研究員のみなさま、悉皆ならびに追跡調査にご協力いただきました施設や学校等の各団体のみなさま、公開研究会においてご参加いただきました多くのみなさまに心より感謝申し上げます。

障害のある人の実演芸術「パフォーミングアーツ」に関する調査研究事業  
事務局

総論

交響する福祉へ

「アウトサイダーライブ」の萌芽から

交響する福祉へー「アウトサイダーライブ」の萌芽から

研究事業座長 小暮宣雄(京都橘大学)

日輪青くかげろへば  
修羅は樹林に交響し  
陥おちいりくらむ天わんの椀から  
黒い木の群落が延び

(宮沢賢治「春と修羅(mental sketch modified)」より)

第1章 ボーダレスな世界—「限界芸術の作家」としての宮沢賢治—

(1)「春と修羅」より

岩手の詩人であつ童話作家、そして新しく「不断の潔く楽しい創造」である「農民芸術」を唱えた求道者にして熱心な宗教家でもあつた宮沢賢治。

冒頭に掲げたように、心象スケッチ『春と修羅』(大正 11、12 年)の同名の作品の詩句(以下引用符はその詩句)において、賢治は自ら、天界と地上界を往復・彷徨する(阿)「修羅」となって「樹林に交響」している。そして、それによって起きるのは、(暗黒の象徴にとりあえずは見える)「からす」が「喪神そうしんの森の梢から／ひらめいてとびたつ」という、一見不吉な現象である。

「まことのことばはうしなはれ／雲はちぎれてそらをとぶ」

「ああかがやきの四月の底を／はぎしり燃えてゆききする／おれはひとりの修羅なのだ」。

どうして、賢治は、天上的な幸せに満ちた春の陽光のなか、暖かく明るいはずの草地、かがやく四月を、ひたすら暗く「唾(つばき)し」「はぎしり燃えてゆきき」し青々ふかくかなしみ、なみだを風景に落とすのだろうか。あるいは、自らを阿修羅であると規定するが故に、美しい春にあつて、独り「ほの白く肺」をちぢませながら、それでも「あたらしくそらに息づ」き、歌おうとするのであろうか。

「このからだそらのみぢんにちらばれ」。それはまるで、世界には自分しかいないような喪失感・悲壮感のもと、天国と地獄、「春の鳥」と「喪神の森」の「からす」との間(=陰陽のボーダー)に身を引き裂かれそうになっているようにも見える。

しかしながら、このような自己否定と献身希求まなかの最中にあつて、自然との交通、呼びかけあう類稀な関係は賢治を活かしていく原動力でもある。修羅は樹林を交響し、「鳥はまた青ぞらをき截」つて「ZYPRESSEN」(糸杉)へと羽を伸ばす。輝ける春は、その裏面の黒々とした影もろとも、修羅なる導きの矢、つまり、ボーダレスな心象スケッチをする賢治の身体を媒体として、ライブし交通するのである。

阿修羅であり続けることを選んだ賢治は、依然として善悪・陰陽のボーダーにありつつ、両者を

交響させ、これらの「二重の風景」を互いに呼応させることで、両者の違い、そのコントラストを鮮やかにしつつ、全体としてはボーダレスな幻想の世界へと私たちを導く。なんという不思議な世界！

## (2) 学校芸術、農民芸術—限界芸術の場づくり者としての賢治—

実は、宮沢賢治が90年も前に花巻で現出させたものであるこの不思議さこそ、今回書きたいと思っている「アウトサイダーライブ<sup>ii</sup>」の秘密の鍵の一つではないか、と思っている。なぜなら、次章以下においてより詳しい説明を行うが、予めその結論を先取りすると、

a) 修羅 → アーティスト(ここでは特に、先端芸術家 + アウトサイドアーティスト)

b) 樹林 → 社会(ここでは特に、分断された家庭、地域、福祉・学校施設 = 「共同体・の・集列体」<sup>iii</sup>)

c) 交響 → アーツの場(ここでは特に、アウトサイダーライブの場<sup>iv</sup> = 「交響圏」)

と比喩的に図式化することができるからである。

当時、20歳代半ばで花巻農学校の新人教員でもある賢治は、一方で、生徒たちには実用としての科学技術を教えつつ、同時にこの心象スケッチの如く自然と人間を隔てず、詩壇的技巧を用いず、世界をまるごとダイレクトに感受しようとしていた。すなわち、当時において専門的な詩形(定型文語詩を作る専門詩人によって詩壇が形成されていた)ではないという意味で「心象スケッチ」とあえて呼んだ新しい「韻文」(謙遜しているようで、実は今から見ると当時において実験的な先端芸術としての「詩」)によって。

さらに賢治は、言語芸術のみならず、生徒とともに、花壇の設計や修学旅行プログラム、あるいは、音楽や演劇ダンスなどを融合した普段の学校イベントにおいて、父母や同僚教員などの世間的評価、専門的な鑑賞者の眼差しなどをまったく気にしない形での「芸術<sup>v</sup>」を創作した。そして、それらを周りと一緒に享受しようとし、それを可能にするような「限界芸術の場」づくりを模索していた<sup>vi</sup>。

そこには、「限界芸術の作家」としての賢治が、実に自然科学と芸術文化とのボーダーを越え、さらに、専門化されないアーツの場としての学校芸術の実践、専門と非専門、芸術と生活のボーダーをも消し去るような、若々しい実験的で求道的な衝動があったのである(原子朗氏も同趣旨の指摘を行っている<sup>vii</sup>)。

そののち、教員を辞めた賢治は、羅須地人協会で提唱した「農民芸術」(農村コミュニティにおける「限界芸術」)を提唱し、農作業と芸術との境界をなくすことをより真剣に模索し講義したのだった。

「おお朋だちよ いっしょに正しい力を併せわれらのすべての田園とわれらの生活を一つの大きな第四次元の芸術に創りあげようではないか」、「詞は詩であり 動作は舞踊 音は天楽 四方はかがやく風景画」、「巨きな人生劇場は時間の軸を移動して不滅の四次の芸術をなす」（「農民芸術概論綱要」より）。

## 第2章 実演芸術を拡張し刺激する「アウトサイダーライブ」

### (1) アウトサイダーライブの定義

第1章では、宮沢賢治の言語芸術を中心にしつつ、同時に生活と芸術のボーダー（両者のマージン、縁辺）にあって人びとの自由な表現を促し共感を呼ぶ「限界芸術 marginal arts」の賢治による場づくりの試行錯誤が、結果として様々な「ボーダレス」にいたったことを述べた。つまり、ここで考察しようとする、ボーダレスに開かれた場としての「アウトサイダーライブ」にも通じる、きわめて先駆的試みであることを確認したわけである。

すでに前章において注書きには書いたが（注2参照）、この報告書で指し示す「アウトサイダーライブ」の操作的な定義は、短縮すると「専門的な芸術教育とは無縁の人びとによる演劇ダンス音楽などの実演芸術」である。ただし、担い手に注目する以上の定義は、芸術学的には、従来はそれらを音楽演劇ダンスなどの実演芸術の外にあって（out-side）、実演芸術とは言わなかったような、公演（ライブ）に概念を拡張していることにもなるので、「アウトサイド実演芸術」と言い換えることもできると思われる。

また、アウトサイダーアートの定義（狭義のもの<sup>viii</sup>）は、この実演芸術（パフォーミングアーツ）のかわりに、美術工芸映像などの視覚芸術（ビジュアルアーツ）を置き換えたものとなる。同じく「アウトサイド視覚芸術」とも呼びうる。ここでは、狭義のアウトサイダーアート定義をとるため、このアウトサイダーアートとアウトサイダーライブ、そして、「アウトアサイド文芸」部門などを加味したすべての「アーツ」ジャンルに対応する言葉としては、「アウトサイダーアーツ（アウトサイド芸術）」という用語を用いることとする。

いままで述べたことを図式化すると、

$\boxed{\text{アウトサイダーアーツ}} = \boxed{\text{アウトサイダーライブ}} + \boxed{\text{アウトサイダーアート}} + \boxed{\text{アウトサイド文芸など}}$

であり、したがって、

$\boxed{\text{拡張されたアーツ}} = \boxed{\text{従来のアーツ（インサイド芸術）}} + \boxed{\text{アウトサイダーアーツ（アウトサイド芸術）}}$

となる。

### (2) 限界芸術との関係

ここで先ほど定義した「アウトサイダーアーツ」とはまったく別に発想された概念である「限界芸術」についても、少し触れる必要があるだろう。なぜなら、限界芸術も従来の芸術概念を拡張し、生活と芸術の縁にあるものを、名づけることにより私たちに意識化させるため、すでに触れた宮沢賢治の実践のほか、柳田国男の民俗学研究、柳宗悦の民芸評論をもとに 1960 年ごろ、鶴見俊輔氏によって提案的な言葉だからである<sup>ix</sup>。

まず図式から入ると

$$\boxed{\text{拡張された芸術概念}} = \boxed{\text{純粋芸術 (Pure Art)}} + \boxed{\text{大衆芸術 (Popular Art)}} + \boxed{\text{限界芸術 (Marginal Art)}}$$

となり、それぞれの鶴見俊輔氏による定義は、表 1 のようになる。つまり、限界芸術とは、純粋芸術の専門性の反対側にあり、しかも、大衆芸術のような政治経済社会への芸術の過度の同化(企業家・営利主義的プロデューサーによる芸術の市場化・従属)をもたらすものではないという区分になっている。

図表 1 鶴見俊輔による芸術概念分類

芸術の種類	純粋芸術 (Pure Art)	大衆芸術 (Popular art)	限界芸術 (Marginal Art)
芸術の創作者	専門的芸術家	企業家と専門的芸術家の合作	非専門的芸術家
芸術の享受者	専門的享受者	大衆	非専門的享受者
社会との関係	芸術の非社会化・非政治化	芸術の過度な社会化・政治化	芸術を人間の活動全体として把握
具体例 (p88 「芸術の体系」表より)	交響楽 バレエ カブキ 絵画 彫刻 詩 能 文楽 前衛映画 電子音楽	流行歌 浪花節 東おどり ポスター 公園 紙芝居 時代物映画 チャンバラ のタテ ラジオ・ドラマ	民謡 鼻歌 盆おどり らくがき 年賀状 手紙 盆栽 墓 祭 葬式 家族アルバム デモ いろはカルタ 見合 会議

鶴見俊輔『限界芸術論』(1960 年出版→1999 年ちくま学芸文庫所収)による論述をもとに筆者作表

このように見えてくると、無名な人びとによる、生活や労働、宗教などの広範な人間諸活動との関係でしか明らかにならない「目立たぬ様式であ<sup>x</sup>」る限界芸術が芸術概念の拡充であることから、同じくインサイド芸術の拡充であるアウトサイダーアーツとの関連性が明らかになる。専門的芸術教育を受けていない創作者によるアーツがアウトサイダーアーツであるという定義から明らかのように、

その範囲や思想には共通性が多い。

しかしながら、マージナル性とボーダーのボーダレス化の違いは留意すべきであろう。また、限界芸術論では、この限界芸術は人類のはじまりの芸術であり、個人としても幼児期における芸術の初めての現われであるとされているように、その範囲は歴史的にも生活領域的にも広範なものとなっている。それに対してアウトサイダーアーツは、すでに鶴見氏が規定する純粋芸術や大衆芸術が存在しているなかで、それらの基準では測られない世界があることを明示するために出来た 20 世紀後半の現代芸術的思考がベースにあることは注意すべき点であろう。

ただ、限界芸術として始まったものが、大衆芸術になり、純粋芸術（後に純粋芸術を市場との関係において、部分的に市場が成立する伝統芸術と成立しない先端芸術／先駆的芸術に分割する動きが生まれる）ともなるように、アウトサイダーアーツの一部は、インサイド芸術を活性化する効果を生みながら、一部は、純粋芸術のうちの先端芸術へと向かったり、市場を持つ大衆芸術（市場芸術と呼ぶこともある）化したりすることも十分ある（そのことが望ましいとか嘆かわしいとかいう価値判断とは別にして）。

したがって、アウトサイダーアーツ（アウトサイド芸術）は限界芸術そのものではないが、上記のように限界芸術論を援用し、それらの概念と関連づけて考察することができるのである。

### 第 3 章 ライブに出会うために一家庭、施設、劇場、寺社、カフェ etc.

#### (1)「アーツプレイス」を探せーアーツマネジメント学からの接近

ずいぶん定義などで手間取ったが、ここから、今年度の研究会の大きなテーマの一つであった、アウトサイダーライブの場所（アーツマネジメント学における「アーツプレイス」）の多層なあり方と重層的展開について、その概念整理を行いつつ、アーツマネジメント学もいささか援用して記述することにしたい。

まず、アーツマネジメントとは「芸術と社会との出会いをアレンジする実践活動」である。なお、ここでの「芸術」はアーツと呼び直されるように、限界芸術やアウトサイダーアーツを含み、「社会」とは、「地域社会はじめ福祉施設や教育機関、産業組織などを含む各種集合体<sup>xi</sup>」を指す。

そして、このように定義されるアーツマネジメントの主要な活動の場、アーツマネージャーの所在地は、以下の 3 つに分けて考えられている。（歴史的に見ると、さきにアーツを担う人たちが生まれるとともに、次第にグループが固定して(a)のアーツカンパニーが成立し、そのうちに定常的アーツプレイスが生まれ、それらをつなぐ機構（オーガニゼーション、インスティテュート）が生まれるという順序が一般的。）

(a) 劇団・ダンスカンパニーや楽団・歌劇団など「アーツカンパニー」の企画運営

(b) 劇場・コンサートホール・能楽堂・寄席・ライブハウス(クラブ)・美術館・ギャラリー・アトリエ・稽

古場・アーツセンターなど「アーツスペース」の企画経営

(c)アーツ NPO や芸術助成団体・芸術情報センターなど「アーツサービスオーガニゼーション<sup>xii</sup>」の活動

さて、前章で議論した限界芸術の場を見ても判るように、インサイド芸術—純粹芸術や大衆芸術—と違って、限界芸術あるいはアウトサイダーアーツの場は、美術館や画廊、コンサートホールやライブハウス、劇場や映画館などの専門的で恒常的なアーツスペース(b)であるとは限らない。

それどころか、アウトサイダーアーツが生み出される場、そして、それらの表現と関係者、さらには地域の人びとはじめとする鑑賞者と出会う場は、そもそも多様でさりげなく、かつ思いがけない形で出現する。副題に書いたように、その場は、家庭であったり、福祉・教育施設であったり、寺社やカフェ(地域コミュニティ)、あるいは、空き地やはらっぱ、公園や広場や街角などの街角空間、あるいは人びとが移動・交通する空間<sup>xiii</sup>であったりする。同時に、従来の芸術自身によりいま同時代的課題として持っているアーツスペースの閉鎖性打破のための「アウトリーチ」(専門機関が行うアーツに無縁な人びとへのアプローチ手法)が開拓しつつある「アーツの場」、関係づくりのあり方と、このアウトサイダーライブの場の多様性とは、多く重なるものでもある。

したがって、それぞれの研究員が活動している場の違いによって議論が当初かみ合わなかったが、それは、そのイメージするアーツの現われの場と立ち位置や関わり方に違いがあるからの、当然の帰結であった。

すなわち、アウトサイダーライブは限界芸術と同じく、じつにその「現れの場」が複層的でかつさりげないものなのである。それがまた、多くの人びとに対してアーツに参加する敷居を低くする意義を持ちうることになり、福祉の関係者以外の人たちへ、障害のある人たちの生き生きとした表現や表情、存在そのものを可視化し、地域の人びとはじめいまままで接触のなかった市民が交通するするきっかけにもなるのである。

## (2)アウトサイダーライブの多層的な場

では、具体的にどのような場で、アウトサイダーライブが生まれ、人びとはそれに出会うのであろうか。

とりわけアウトサイダーライブにおいては、アーツを創作・実演している演者とそれを見届ける観者が出会う場という視点が必要になる<sup>xiv</sup>。すなわち、アーツの場は享受・評価する人がどのようなものであるかで分類することが意義深いということにつながる。ここでは、アーツマネジメント一般でも通じることになる「享受・評価分類」の試案として、きわめて私的で親密な場所①と、異質な他者にも開かれている公共的な場所②に大別し、さらに、その中間的な場所③の可能性にも言及することとする。

## ① プライベートな場所・関係におけるアート

### 1-1.お一人アート

イメージは個室でのアート。自分自身のためにそれを表現する。美術的なものでは、出来上がった作品との対話があるが、ライブ的なアートにおいては、表現している自分をもう一人の自分が楽しみ見ている、聴いている状態を想定することになる。過去の人やここにいない人、想像者との会話もアウトサイダーライブでは豊富な素材である可能性がある(実際には傍らに人がいないので記録はとても困難)。

### 1-2.親密圏アート

気が許せる人同士のアート、とりわけ音楽やダンス、寸劇、コントのようなライブ。場所は家、家族同士だったり、親友同士だったりする。もちろん、恋人、夫婦、親子もふくめ、極めて親密な関係によって生まれるアート。ラブレターや写真の交換など、限界芸術とも重なるものである。1-1との違いはもちろん、評価する相手、享受(エンジョイ)する人が実際にいるということであるが、お一人アートをときおり公開するような連続性もあるので、①全体を広く親密な場アートというふうにとまとめることも可能である。

## ② パブリックな場所・関係におけるアート

### 2-1.公共圏アート

とりわけ公的な資金で設立された公立の劇場や美術館が目指すべきは、アートを通して市民が「公共性」を獲得することだといわれ続けて久しい。しかしながら、公共性とは第一に公開性であり、異質な他者の眼差しを受容し共存することである。つまり、どのような他者がそこに訪れようとも、一定のルール(携帯電話の音源を切ってほしいなどの諸注意はじめ、要予約とか有料料金とかのルール)を守る限り、その鑑賞や参加を拒まないことを大切にすアート、公私(国公立と民間立)の区別なく、公共圏アートと呼ぶことができよう。

また、つぎの 2-2 とも関連するが、ある組織、施設の人たち(「アウトサイダーライブカンパニー」ということも出来るかも知れない)が、ホールで行う場合、これが、貸し館タイプでしかも関係者中心の告知となる場合は、この公共性はかなり減衰してしまう。つまり、文化ホールのうち、借りる方に任せ「貸し館」タイプの運営しか行わない所は、「公共圏アート」の場ではないともいえる(日本の3000 近くもあるという文化ホールの大半はこのタイプであるという批判が以前からかなりある)。公共圏アートの場とは、「酷評を受け入れたり、毀誉褒貶が多い実験的な作品をあえて出したりすることがパブリックシアターである」という覚悟を持っているところであるからである。

## 2-2.組織内アート

通っている学校や福祉施設などにおけるアート創作とその組織内発表会や定期旅行、修学旅行。定期的、制度化が強く、行事、周年行事となっているものがある。昔の学校では「学芸会」と呼ばれ、そののち、学習発表会とか言われたもので、これもアウトサイダーによるライブとなる。組織内における制度化された 2-1 と似たところもあるセミパブリックなアート行為なので、これを組織内アートと名づけることができる。

組織内アートにおいては、鑑賞者も組織内の関係者や父母などの保護者・介護者ということになる。組織目的の達成度を測ることが評価基準になるため、表現の独自性や面白さをアートとして享受することにはフォーマルには消極的になることが想定される。つまり、教育施設・組織ならば、その教育的効果、福祉施設ならば、彼らの自立度や訓練効果度合いが尺度になる(インフォーマルな活動や放課後の活動にはより自由な楽しみが付与されるけれど)。

なお、組織内アートに準じて、町内会・自治会における演芸会や親睦旅行、地藏盆などのライブもここで取り上げておく。やはり、組織内アートの評価基準は、町内会なので、親睦、身内懇親の度合いということになるだろう(いわゆる「身内受け」)。

いずれにせよ、組織内アートにおいては、インサイド芸術に準じたいわゆる「健常者」がするお習い事的アート表現が規範となるため、お一人アートや親密圏アートより、型にはまった自由度の少ないものとなり、とりわけ、自由な表現を希求する(アウトサイダーライブを展開するのに適した)会員にとっては、居心地の悪いものになる恐れがある。これは、第 1 章において暗い「樹林」=分断された社会として提示した、見田宗介氏の言う「共同体・の・集列体」(注 3 参照)における拘束された人格的な関係(personal+pre-voluntary)に対応する。

他方、このアウトサイダーライブは、組織ぐるみで定期的に行う制度化度が高いため、障害のある人たちなどアウトサイダーにとっては、アートに触れる機会が平等に広くあるという利点がある。したがって、この組織内アートをいかに、2-1 の「公共圏」(あるいは③のコモン圏)へと開くことができるか、あるいは、逆に、親密なる関係においてある自由な表現の場に近づけることができるかが大きい課題であり、今回のアンケート調査を通じても確認されたことでもある。

### ③ コモン圏アート

ここで取り上げるのは、①と②の間、家庭や施設、あるいは既存の専門的アートスペース(公共圏アートの場)とは別に、ほぼ「地域コミュニティ」と呼ばれる範囲において様々な形と場所で昨今よく展開されてきているアート公演などについてである。

つまり、具体的には、カフェ、レストラン、居酒屋、あるいは、役目を終えた学校や蔵・倉庫・ガレ

ージ、工場・商店・旅館、町屋・アパートなどを改築したオールタナティブスペースや、寺社などのかつて無縁の世界としてあった場所をアーツスペースとして活用するライブ。あるいは、より都市と直接に交通し合える場所として、ストリートや商業施設、空き地、はらっぱ、荒地、個人宅など、自分たちの創作意欲を満たす場所を探すことも含めて表現とすることとそこでの鑑賞享受のあり方が、いま、とても重要なアーツマネジメント課題である。ここではとりあえず、以上のアーツの場を「コモン圏アーツ」と呼んでおくことにしたい。

どうしていまコモン圏アーツがクローズアップされるのか。おそらく、現在よりさらにアウトサイダーライブがより自由にかつ多彩に展開することを願う人びとにとって、アウトサイダーライブをかつちりとした舞台と客席のあるステージに上げるのは、かなりむずかしいからだろう<sup>xv</sup>。いや、彼らをステージに上げることは介護などの問題をクリアすれば可能だが、その親密圏などで見せた面白さ、新鮮さの大半をなくしてしまう危険の方がその理由としては強いのかも知れない。

つまり、公共圏アーツの場である文化ホールや大きな劇場には、パブリックであること故の、価値観や世界観を共有しない異質な他者との共存、批評関係を成立するための規範がある。すなわち、見田宗介氏の用語を使えば「ルール関係(ルール圏)<sup>xvi</sup>」の度合いが強いという性格上、障害のある人たちのアーツ特有のルーズな変更、その場が引き出す表現者・鑑賞者間の観応性、創発性による予測不可能な即興性などを逆に制約することになるという逆説的現象が生じやすい。

コモン圏アーツの特色は、鑑賞であることもあるが、どちらかという、ずっと逢わなかった昔の知人に逢うというような「遭遇」であったり、あるいは、はっとするような事件的なぶつかりであったりする。評価の形も、コミュニティとの関係批評であるとか、アーツプロジェクトのプロセス観察とかがありうる。より、個人的な感情レベルで言えば、驚愕、畏敬、放心、交感、ほのぼの、無視、生命への危険、性的嫌悪、差別意識の自覚、侵犯幻想などが生じる可能性のある場である。つまり、客席に守られていない分、巻き込まれる鑑賞者にも人間のぎりぎりの感情が出る可能性が高い。

ここコモン圏アーツという公と私の交じり合った場「コモン」(見田宗介氏の言葉でいうと、ルール関係と交響関係が両方存在する様相を持つ中間的な場)においてこそ、障害のある人たちなどの表現を「アウトサイダーライブ」とわざわざ呼んで、これを名づける意義が存在する。つまり、親密圏アーツと公共圏アーツとの中間領域で、創作者(表現者:演者)と鑑賞者(享受者、観者)が、既存のアーツの「発信→受信」状態を越え、彼我の境界を揺さぶられるような、「交信+交通」する経験をするのである。

#### 第4章 福祉政策としてのアウトサイダーライブー交響圏と公共圏ー

前章では、親密圏アーツ、交響圏アーツ、そしてコモン圏アーツを中心として、組織内アーツの

課題やお一人アーツのようなゼロ地帯までを含んだ5つの分類を行った。つまり、アーツマネジメントを、既存のアーツスペースのみならず様々な場を「アーツの現れの間」=アーツ現場としてはじめて包含しつつ分類することができたのである。これは、この研究会で取り上げられてきた、障害のある人たちの実演芸術（パフォーミングアーツ）を中核とするアウトサイダーライブがいままさに、このアーツマネジメント分野を豊かにし、アーツ概念を拡張するのみならず、アーツマネジメント領域に新たな挑戦課題を与えてくれたということの意味するものである。

他方、「どんな人びとにもそれぞれの特性に応じて各自の幸せづくりをサポートする」ことを目的とする福祉政策においても、いままで述べてきた芸術と社会の縁結びをめざすアーツマネジメント術やそれを可能にするアーツスペースとそのスタッフ、そして両者をつなぐアーツサービスオーガニゼーションの人たちと福祉現場との連携が非常に有効でかつ緊要であることを浮き彫りにしている。

また、劇場や文化ホールという専門的アーツスペースとともに、同じ公共圏アーツスペースでもより民間的でカジュアルなライブハウスやクラブ、画廊のような場所もこのアウトサイダーライブには欠かせることのない場所になることは確実である。

しかしながら、やはり公共圏アーツスペースとの連携と同じくらい重要になるのが、いまようやく緒に着いたばかりの福祉側からの積極的なコモン圏に対してのアーツマネジメントの働きかけである。別の言葉でいえば、まさに、コミュニティアーツとかオールタナティブスペースマネジメントとか呼ばれる分野が地域福祉活動の新しい展開にこれから大きく寄与することになる。（これは、2月に大津プリンスホテルで行われた「アーツというツールで支援のいらぬ場をつくってみよう！」における「めくるめく紙芝居を体験する」及び「ひとのからだをタイカンする」のワークショップと二つをコラボしたアウトサイダーライブ公開リハーサルや本番からも検証させることであり、当報告書にその詳細は記載しているので参照のこと。）

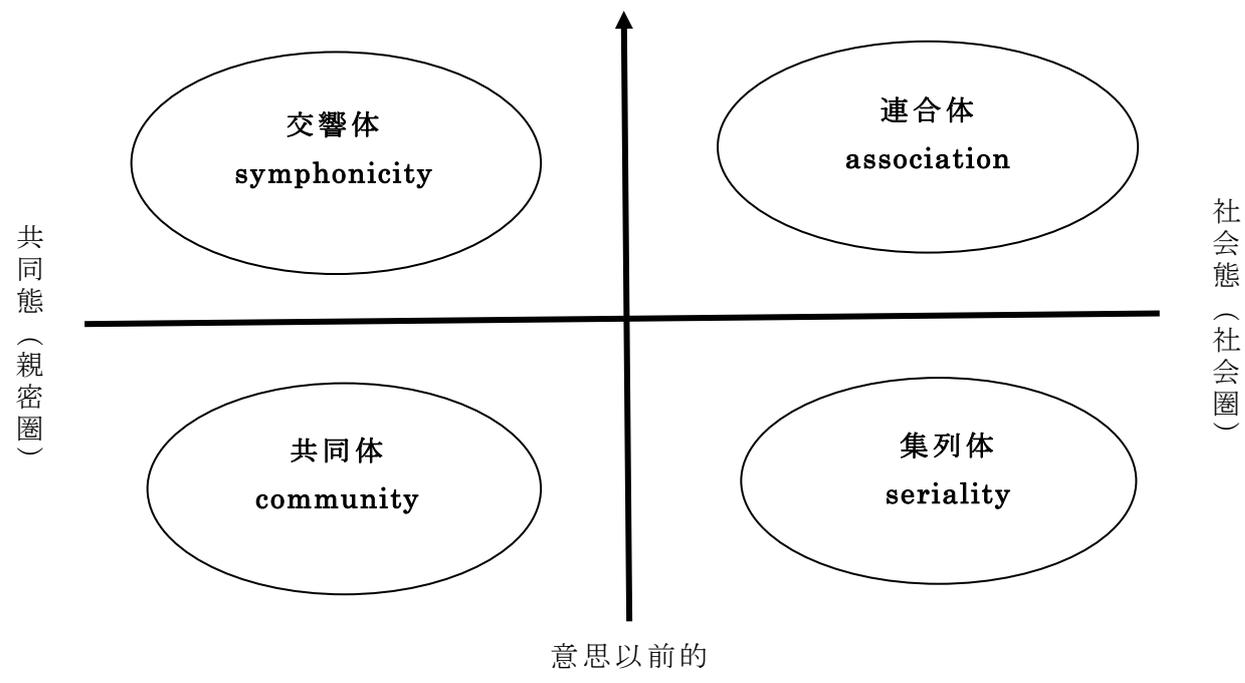
さらに、アーツの原点である限界芸術の主要な場、つまり親密なる場づくりが、このコモン圏スペースが開発され人びとによって活用されることで、脚光を浴びることになるだろう。親密圏アーツや組織内アーツが不必要になるのではなく、逆に、コモン圏における自由なアーツを経験しそこと交流することによって、外部の圧力ではなく自らの創造性と想像力により、閉ざされた家族関係や施設組織内関係を柔らかく変容させていくことが期待されるのである。

つまり、コモン圏アーツを生む土壌・ワークショップの間として、親密なる場の重要性が見直されることになる。制度・施設に守られた障害のある人たちの組織内アーツの場に自由な風が外部からやってくることにより、福祉現場の人間関係や生活や仕事の仕方においても、柔らかさと創意工夫によるイノベーションの余地が広がるわけである。それはまた見田宗介氏の言う、「共同体・の・集列体」（意思以前の pre-voluntary）から「交響体・の・連合体」（自由な社会／意思的 voluntary）<sup>xvii</sup>への動きの具体例となる（以下、図表2を参照のこと）。

このような、コモン圏と親密圏を自由に流れるアウトサイダーライブの風。実は、冒頭、宮沢賢治の詩を引用したのは、樹林を鳴り響かせる修羅とその友人たちがいる「交響体 (symphonicity 交響圏)」とは実はこのように個人が自由な意思により交通するコモン圏と親密圏の関係ではないか、という予感からだった。まさに、見田社会理論を援用しつつ比喩的にいえば、「樹林」は従来の福祉現場(「共同体 community」)の「集列体 seriality」であり、これからの福祉界を交響する役目を担うのは、修羅である賢治のような先端芸術家や、彼らとともにアーツの場に立ち会う花巻農学校の生徒や農民芸術＝限界芸術を担う人たちである。

以上、ここで新しく提案してきた「アウトサイダー」たちが社会に響かせる音楽、演劇、舞踊のライブな律動。それらこそが、既存の福祉・教育領域をはじめとする公共圏のあり方の見直し(「連合体 association」化)をも見据えつつ、ボーダーを揺るがせ、「交響する福祉」へと、私たちに誘うのである。

図表 2 見田宗介氏による「社会の存立(形式)の4つの象限」  
見田宗介『社会学入門』(岩波書店、2006年)p18,187を合体  
意思的 (〈自由な社会〉)



共同態:「ゲマインシャフト」 人格的な関係 personal

社会態:「ゲゼルシャフト」 脱人格的な関係 impersonal  
意思的:自由な意思による関係 voluntary  
意思以前の:意思以前の関係 pre-voluntary

---

<sup>1</sup> 「芸術はいまわれらを離れ然もわびしく墮落した」 宮沢賢治「農民芸術概論綱要」(1926年)より。

<sup>1</sup> 小暮宣雄「アウトサイダーライブは、境界を揺らして魅せる。」第8回全国障害者芸術・文化祭滋賀大会記念図録集『アウトサイダーライブ』(発行:2009.3.15 事務局:滋賀県社会福祉事業団)p9より、暫定的定義を引用:

アウトサイダーライブとは「障害者はじめ、専門的な芸術教育とは無縁の人びとが、ステージ上はじめ鑑賞者などのいる所で表現する、音楽実演や演劇ダンス公演、それらの稽古やワークショップ活動」をいう。

<sup>1</sup> 見田宗介『社会学入門—人間と社会の未来』(岩波書店、2006年)p185より「閉じられた親密な関係の圏域としての「島宇宙」たちの並列する世界の構造」がこの「共同体・の・集列体」であり、「交響圏(交響するコミュニケーション)」とそれらの自由な連合は、「共同体・の・集列体」から転移すべき社会の複層構造として構想されている。

<sup>1</sup> アウトサイダーライブ(アウトサイダーアーツの実演芸術部門)の場＝先端芸術家である「修羅」＋アウトサイドアーティスト「鳥、からす」と「共同体・の・集列体」の社会成員「けらをまとった農夫」同士が交通する場＝「交響圏(交響するコミュニケーション、交響体 symphonicity)」。見田社会学論による独特の用語は第4章でまた触れる。

<sup>1</sup> 当時はもちろん「芸術」と認知されていたものではなく、鶴見俊輔氏が提唱した「限界芸術」としてのアーツを意味する。

<sup>1</sup> 鶴見俊輔『限界芸術論』(ちくま学芸文庫、1999年)。これによると、限界芸術の定義は、非専門家によって創作され非専門家によって享受される芸術で、他に創作も享受も専門家による純粋芸術と、大衆が享受者で専門家と企業家による創作である大衆芸術がある。

<sup>1</sup> 原子朗『宮沢賢治とはだれか』(早稲田大学出版部、1999年)p125より「ボーダー(境界)を越えることは、彼のすべてに言えます。人間と動物のボーダーレスは朝飯前で、現実と異界(超現実)の、東洋と西洋の、音楽と劇と絵画、文学といったジャンルのボーダーレス。例えば彼の、あの熱心な浮世絵あさり。東京にくるたび、神田あたりで買い集めています。賢治が浮世絵を集めたのは、あの浮世絵の線やかたち、色彩や遠近法に『音楽』を聞いていたからです」。

<sup>1</sup> アウトサイダーアートの広義の定義では、狭義のアウトサイダーアートにアウトサイダーライブ、さらに、アウトサイダー一文芸などを含めるものとなる。また、最狭義のものとして美術のみを指すという考え方もありうる。

<sup>1</sup> 鶴見俊輔前掲注6著書p14「今日用語法で「芸術」とよばれている作品を、「純粋芸術」(Pure Art)とよびかえることとし、この純粋芸術にくらべると俗悪なもの、非芸術的なもの、ニセモノ芸術と考えられる作品を「大衆芸術」(Popular Art)と呼ぶこととし、両者よりもさらに広大な領域で芸術と生活との境界線にあたる作品を「限界芸術」(Marginal Art)と呼ぶことにしよう。

<sup>1</sup> 鶴見俊輔前掲注6著書p38

<sup>1</sup> 小暮宣雄「アーツマネジメント分類学—静態的分類から実践動機分類へ」世界劇場会議名古屋・国際フォーラム発表(2010.2.13)より。なお、アーツマネジメントの静態的分類(アーツカンパニー、アーツプレース、アーツサービスオーガニゼーション。そしてそれぞれ、営利、非営利民間、政府に分かれる)は本文でも少し触れている。

<sup>1</sup> c)は、a)とb)とは独立して、これらのアーツカンパニーやアーティスト、アーツプレースやその他アーツが行われ

---

る可能性のある社会の場相互間の連携を強化する組織・機構。NPO が中心だが、公的組織（たとえばフィルムコミッション）や営利組織も存在し、後者ではアーティストプロダクション（音楽事務所）、コンサートツアー会社や映画配給会社などがこれに当てはまる。

<sup>1</sup> なお、かつてのハプニング演劇などを髣髴とさせることになるが、電車の車両や駅のプラットフォームなど障害のある人たちが好む場所においても、アウトサイダーライブ的な振舞いがつねに起きる可能性がある、もちろんそれはインフォーマルであって必ずしも意図的なものではないし、きちんとしたアーツ的マネジメントを行うまでには至ってはいないけれど。

<sup>1</sup> 小暮宣雄前掲注 2 論文 p10 <細馬（宏通）さん流に言えば、どんな「アーツ」でも、「見とどける人（＝意識的あるいは身体的にそれを視聴・体感する人）」がいて初めて、アーツになる>。

<sup>1</sup> 栗東芸術文化会館さきらと滋賀県社会福祉事業団などによる糸賀一雄記念賞音楽祭のような例外がもちろん存在する。これがどうして成功しているのかを研究することで、実に興味深い考察が可能になると思われるが、とりあえず、指摘しておくとするれば、ずいぶん入念なワークショップと参加者間の信頼関係、一見のんびりしているようで極めて適切なスタッフワーク、本気度が普通でないアーティストの真剣勝負の関わり方などの幸福な結合がそこには見られるということになる。

<sup>1</sup> 見田宗介前掲注 5 著書 p167～201 の補「交響圏とルール圏―〈自由な社会〉の骨格構成―」参照。とりわけ、交響圏の関係における他者とルール圏の関係における他者の違いを意識することが大切となる。すなわち、前者は「生きるということの意味と歓びの源泉である限りの他者」であり、後者は「生きるということの困難と制約の源泉である限りの他者」(p174)である。

<sup>1</sup> 見田宗介前掲注 5 著書 p186

# 研究経過



## 1. 研究目的

障害者の芸術文化活動を通じた社会参加が注目され、絵画や陶芸など視覚芸術（ビジュアルアート）を対象とした展覧会も数多く開催されるようになってきました。一方で、これら視覚芸術とあわせてダンスや音楽等の舞台上での表現としての実演芸術（パフォーミングアート）も注目されつつあります。実演芸術（パフォーミングアート）は、既存の演劇やパフォーマンスを超えた新しい表現を通して「障害」の枠を超えて評価され始めていますが、体系的な調査や研究は行われていないのが現状です。

この事業では、近畿圏域の障害者支援施設・団体や特別支援学校、社会福祉協議会で行われている表現活動の現場を訪れて活動の実態を把握し、実演芸術（パフォーミングアート）の今後の可能性について研究を行うものです。

## 2. 調査研究の実施方法と経過

### (1)実施主体

障害のある人の実演芸術「パフォーミングアート」に関する調査研究会

※事務局 社会福祉法人オープンスペースれがーと（滋賀県湖南市）

### (2)調査の対象と方法

本研究事業では、近畿圏内の障害者支援施設・団体、特別支援学校、市区町村社会福祉協議会において、実践されているライブ系表現活動の実態を把握することとして、近畿圏愛約1970ヶ所に対して、アンケートによる悉皆調査と、回答された団体（317ヶ所・回収率約16%）の中から7施設・団体をピックアップし、追跡調査（聞き取り）を行いました。

#### ①悉皆調査

以下のように「ライブ系表現活動」と定義づけて、先述した施設・団体へアンケート調査を実施しました。アンケートの内容は、このような活動に対する関心度、実施度を伺った上で、具体的な活動のジャンルや形態・概要を聞くこととしました。

#### 「ライブ系表現活動」

一般に、表現活動は、ビジュアル系とライブ系、そしてことば系（文学、書道）に分かれます。障害のある人の「表現活動」においても同じような分類をすることができますが、いままでは、特に、絵画・造形などのビジュアル系の表現（＝視覚芸術）分野のものに注目が集まり、近年では広く展覧会や図録などで紹介されてきました。

他方、障害のある人の、音楽・演劇・舞踊（ダンス）などのライブ系の「表現活動」（＝実演芸術・パフォーミングアート）の方は、その場における「ライブ」性ゆえに記録されることがあまり行われずに、その実態がよくわからず、また、どのように取り組むといいのか、という政策的な議論があまりなされていませんでした。そのため、今回、その実態を調査しようとしております。

なお、この調査においては、ライブ系の「表現活動」を「アウトサイダーライブ」という用語を使い、ビジュアル系の「表現活動」を「アウトサイダーアート」で呼ぶことにしております。また、「アウトサイダーアート」と「アウトサイダーライブ」をあわせて呼ぶときは、「アウトサイダーアーツ」とし、さらに、現代美術の領域で「パフォーマンスアート」と呼ばれているような境界線上のライブ的な「表現活動」も広く「アウトサイダーライブ」の一つとしていただきたいと思います。

## ②追跡調査

上記の悉皆調査により回答のあった施設・団体の中から、上記の「ライブ系表現活動」に当てはまり、かつ施設、学校、地域(社会福祉協議会)の3つのカテゴリーに分けた中から研究員により選定し、訪問聞き取りによる調査を実施しました。

## ③実施時期

- ・悉皆調査は、平成21年12月中旬から平成22年1月下旬にかけて行いました。
- ・追跡調査は、平成22年3月上旬から中旬にかけて行いました。

## (3)調査研究会

座長：小暮宣雄

(京都橘大学現代ビジネス学部市環境デザイン学科 教授)

研究員：アサダワタル(事編(KOTOAMI)代表、築港 ARC チーフディレクター)

久保田翠(NPO 法人クリエイティブサポート Let's 理事長)

西川賢司(栗東芸術文化会館さきら事業担当部長)

山本佳美(NPO 法人ちば MD エコネット事務局長)

山之内洋(社会福祉法人滋賀県社会福祉事業団企画事業部)

渡邊あい子(立命館大学先端総合学術研究科一貫制博士課程)

事務局：牛谷正人(社会福祉法人オープンスペースれがーと 副理事長)

## (4)経過

### 第1回研究会

平成21年 9月18日(土) 栗東芸術文化会館さきら(滋賀県栗東市)



## 第2回研究会

平成21年11月23日(火) たけし文化センター(静岡県浜松市)



## 第3回研究会

平成22年 2月 5日(金)～ 7日(日)

大津プリンスホテルコンベンションホール淡海(大津市におの浜)



※ 随時事務局会議及びワークショップ等の会議、打ち合わせを行いました。

# 調査研究



## 調査の概要

### 1. 調査の目的

- 今回の事業の目的のひとつに、全国の「パフォーミングアーツ」活動の発掘調査事業をあげました。当初、全国を6つのブロックに分けてそれぞれに拠点事業所を選定し、その事業所を拠点に担当エリアの実演芸術に関する調査、活動主体の発掘を行ってもらう形式の調査を予定していました。しかし、関西を中心とした研究員での打合せ会や第1回研究会で研究員の関係する事業所情報などを集めてみると、現状として障害のある人の実演芸術「パフォーミングアーツ」の定義も定まっておらず、「拠点事業所」を選定する明確な根拠がないこと、また拠点的な事業所があっても関係する団体は限られ、活動の状況を広く収集する基礎情報に欠ける現状があることから、調査の方向性を第2回研究会で修正しました。
- 学校や施設内での教育的・療育的表現活動とその成果発表から、活動の舞台化・公演など公開することを目的としたものまで、体系的ではなくても幅広い活動が行われている現状を把握することに意義があるのではないかとの意見が出されました。
- そこで今回は、対象エリアを限定して(近畿地区)活動実態を広く調査することとしました。  
※調査票は、別紙のとおり。

### 2. 実施時期

- ・ 悉皆調査は、平成21年12月中旬から平成22年1月下旬にかけて行いました。
- ・ 追跡調査は、平成22年3月上旬から中旬にかけて行いました。

### 3. 調査対象

- ・ 悉皆調査の対象は近畿圏内(2府4県)の障害者支援施設、特別支援学校、市町村社会福祉協議会の計1970施設、団体としました。
- ・ 悉皆調査の結果は、317通の回答があり、その回収率は約16%でした。

## 分析と考察

### 1. 悉皆調査結果について

#### <調査の前提として>

前年度に発行した第8回全国障害者芸術・文化祭滋賀大会記念図録集「アウトサイダーライブ」がある。ここではじめて「アウトサイダーライブ(outsider live)」という言葉が暫定的ではあるが定義されている。いまいちど、この言葉の意味するところを確認しておきたい。アウトサイダーライブとは、「障害者始め、専門的な芸術教育とは無縁の人びとが、ステージ上ははじめ鑑賞者などのいる所で表現する、音楽実演や演劇ダンス公演、それらの稽古やワークショップ活動のこと」と小暮は定義している。一般的に、ライブやアートと聞けば、それらはホールのような、あるいは美術館のような場所がすぐに想定される。しかし、専門的な芸術教育に無縁の人々(＝アウトサイダー)が舞台上に上がる機会はそう多くはない。では「鑑賞者など」の「など」は何かというと、「見届けるひと」の存在であると述べる。「鑑賞」という、いささか形式ばったものでなくとも、ひとは生活の中で意識的に目にとまったものを、目を奪われたものを、またそういった意識がなくとも傍ですで見ている。その立ち位置や肩書きが、例えばストリートライブで足を止めて見る(聴く)ひと、ワークショップの参加者、福祉現場における職員や介護者かもしれないのだ。すなわち、場所はホールでなくともアウトサイダーライブはすでに各地の生活に近い場面で起こっているということになる。

実際、障害者系の福祉施設ではコミュニケーションともパフォーマンスとも取れる営みが日常的に起こっている。それはなぜか。通常、私たちは言葉を使って話し、理解をしたり／しなかったりのやりとりをしている。しかし、知的な障害をもったひととのそれは、すでに前提が異なり、言葉がコミュニケーションの主なツールになるとは言い難い。ゆえに何かを伝え合うときに自然とその場所で固有に通じるサインや、からだに現れでる動きによってやりとりが生まれる状況にあり、ときにその動きは利用者や職員の間で楽しみになっていたりもする。

また意図や目的を持って、施設で余暇や療育として、表現活動を行っているところもあるが、発表の機会をそれこそホールで行っている施設はそう多くなく、施設内で起こっていることは、なかなか外に情報として出てきづらい。

そこで知的障害施設やサークルの現場の声を取り上げ、全国の実践例をとりまとめたのが、昨年度の冊子であった。その内容はバラエティに富んで、自ら公演を行ってきた施設や団体が多く、成功事例集とみることできる。逆説的ではあるが、成功事例であるが故に、「感心」の対象になり、ともすれば「そういう場所もあるのだな」で終わってしまうような距離感が生まれたのではという反省が研究員にあった。それを踏まえ、今回は福祉現場の内部に踏み込んで、支援者を刺激し、芽を育てる方向性で、より日常の暮らしに近いところでの表現活動に焦点を当てるといったテーマが設定された。

以上前提が長くなったが、このような目的のもと、関西エリアの障害者福祉施設、特別支援学校、社会福祉協議会を対象にして、アウトサイダーライブの洗い出しを行った。

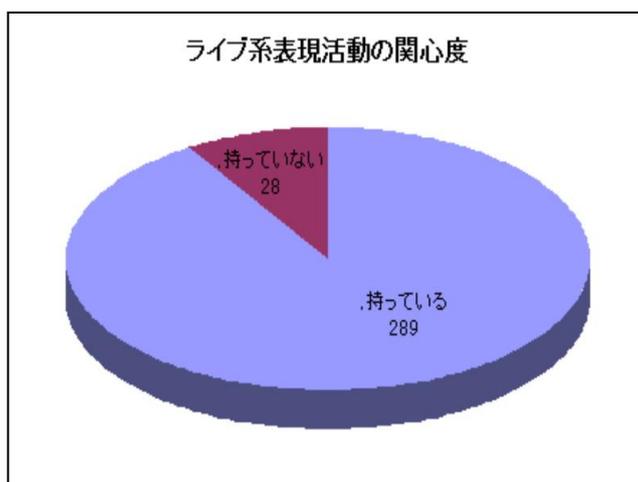
悉皆調査対象となった施設・機関総数 1970 件のうち回答があったのは 319 件で回収率は約 16%である。以下、設問項目の結果(グラフ)を照らし合わせながら分析・考察を行う。

## 悉皆調査(障害のある人のライブ系表現活動に関する調査)

(1)「あなたは、障害のある人の表現活動全般について関心を持っていますか？」

91%と多くの回答者が関心を寄せている。

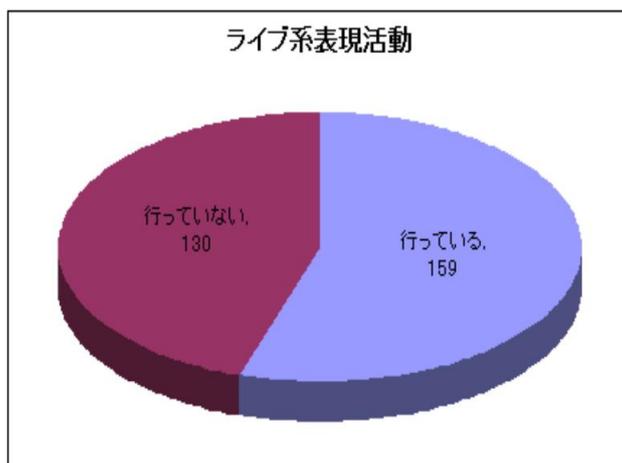
持っている	289
持っていない	28



(2)「あなたの学校・施設・関係する地域の団体で障害のある人のライブ系表現活動を行っていますか？」

実際にライブ系表現活動を行っている人は 55%であり、(1)の関心を持つ人の半数以上が含まれている。しかし(1)で「持っていない」と答えた人のなかにも個人的には関心がないが施設等で仕事として関わるケースも考えられ、ここでは関心を持っていない人に対し理由を尋ねる設問を設定していなかった為、その詳細はわからない。

行っている	159
行っていない	130



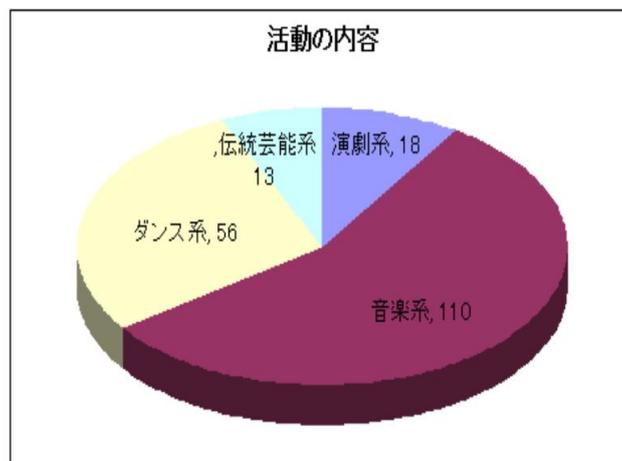
→「はい」とお答えいただいた方は、以下の問いにお答えください。

「それは、どんなジャンルの活動ですか？（複数回答可）」

複数回答可である設問だが、回答総数が 197 と減じている。音楽の回答が約 56%、ダンスが 28%、演劇が 9%、伝統芸能が 6.5%である。複数回答では音楽とダンスの組み合わせが多く、音楽に合わせて身体を動かすという記述が多数見られた。演劇は独立して行われるか、音楽とダンス両方と組み合わせる傾向が見られた。しかしそれぞれ 1 ジャンルの枠組みのなかで活動しているようである。

音楽活動が多いのは、音楽療法（セラピー）としての活動が含まれること、歌や合唱は特別支援学校等でも経験していることでもあり、日常的に流行の歌を歌うような身近さもあって、活動を始めやすいことが理由となるだろう。楽器を使った活動では、打楽器や和太鼓が目だった。二番目のダンスも同じく、ダンスセラピー、リハビリテーション、運動、コミュニケーションの効果・要素が見込まれている印象を受ける。

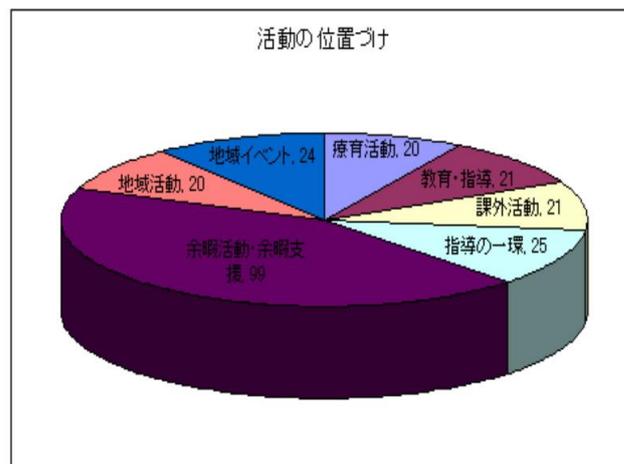
演劇系	18
音楽系	110
ダンス系	56
伝統芸能系	13
その他	0



「それらは、どのような位置づけでとられてありますか？（分野をまたがった複数回答可）」

活動の分野を主に教育分野、主に施設福祉分野、主に社協（地域）分野の3層に分けて位置づけを聞いたところ、回答総数 230 のうち、施設福祉分野の「余暇活動・余暇支援」が突出しての 43%を占めた。他分野との組み合わせとして多かったのは、「余暇と地域活動／イベント」「療育と指導」で、前者の主催は地域生活支援センターや社会福祉協議会など広く参加者を募る母体が多く、福祉施設で日中プログラムに組み込んでいる場合は後者になる。一方、福祉施設での「余暇活動・余暇支援」のみの回答では利用者が参加者であり、課外プログラムであることが想定される。さらに「療育と地域活動／イベント」では近隣住民との交流や理解啓蒙の意図も見られる。

療育活動	20	教育
教育・指導	21	
課外活動	21	
指導の一環	25	施設福祉
余暇活動・余暇支援	99	
地域活動	20	社協
地域イベント	24	



### (3)「活動の状況を教えてください。」

#### 「活動の頻度」

活動頻度は「活動の位置づけ」と「発表形態」とも関連しかなりばらつきが見られる。

プロを目指す位置づけている箇所では、週に二回程度、発声練習や自主練習を毎日行っている。外部から講師を招いて行う療育や指導であれば月1回程度の開催にあるようだ。

#### 「参加者」

参加者については2でも前述したが、福祉施設系の療育プログラムであれば利用者全員、余暇活動／余暇支援であれば希望者による参加者となる。余暇活動でも、サークルとしてなのか、地域活動と連動するかにより参加者は希望者または全員と変化する。加えて、アウトサイダーライブの種類が影響する。役を演じる演劇や演奏パートを受け持つ音楽、つまり即興ではなく練習を積み重ねて発表・公演を行う場合と、反対に事前準備が必要でないようなダンス系ワークショップでは参加の形態も流動的になると思われる。

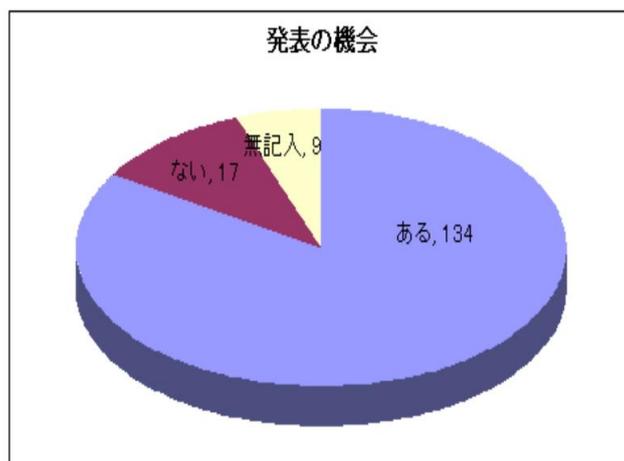
社会福祉協議会や生活支援センターでのプログラムでは参加者を広く募っているところが多いが、活動内容によっては登録制をとっている。

#### 「発表の機会」

発表の機会は回答総数 160 件のうち、持っているのが約 84%にのぼった。具体的には、年1回の障害者フェスティバルへの参加、地域でのお祭り、社協の催し、施設行事や糸賀一雄音楽祭、ビッグアイ(大阪)、自主企画の単独ライブや他施設への訪問公演、幼稚園での公

演(人形劇)、なかには全国規模の大きな大会への出演もあった。発表の機会を持っていない箇所では、利用者の自発性を引き出すことを目的に療育として行っているため発表の機会を持たない、施設内のコミュニケーションを円滑にするため、過去には行っていたが現在は活動が低迷していること、また施設内で完結するワークショップ形態をとること、現在は発表を前提とした活動を行っていないが機会があればやりたいと思っている、などが理由としてあがっている。

ある	134
ない	17
無記入	9



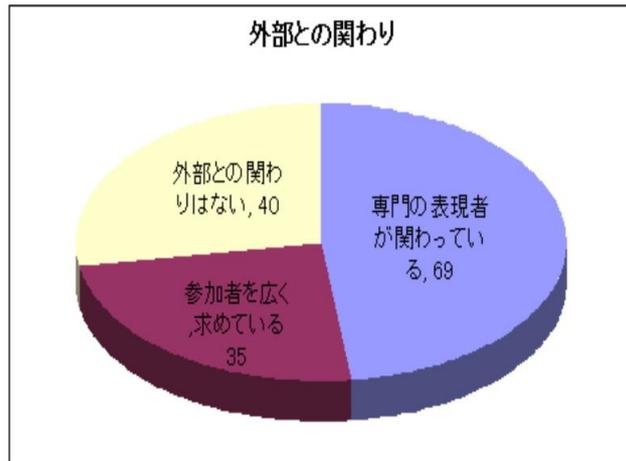
「外部の人が関わっていますか？(複数回答可)」

外部との関わりについて、回答総数 144 件のうち専門の表現者が介在しているのが 48% 参加者を広く求めている形式をとるのが 24%、外部との関わりがなく、施設内や固定のメンバーで行っているものが 27% だった。

今回の調査ではどのような専門家が関わっているのかを聞いていないが、自由回答欄には音楽療法士、コンテンポラリーダンサー、車いすダンスの先生、タップダンサー、和太鼓奏者、音楽家などがあがっていた。

発表を前提としない仲間同士の楽しみや余暇活動の場合、職員やボランティアで表現活動を行い、外部との関わりは会えて求めないケースも少なくない。特別支援学校では卒業生や退職した教員などがメンバー、支援者として関わって地域イベント化している箇所もあった。

専門の表現者が関わっている	69
参加者を広く求めている	35
外部との関わりはない	40



「活動の資金について(複数回答可)」

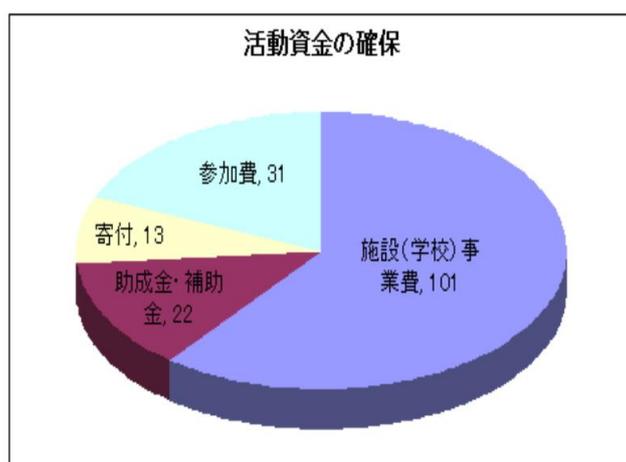
活動資金について回答総数 167 件のうち、施設事業費が 60%、参加費負担で運営するものが 18%、助成金や補助金に申請しての運営が 13%、寄付で賄うものが 7%であった。

これらは施設形態によって変化する。現在の利用者のみで活動参加者が構成されている場合は施設事業費での運営となり、楽器などの道具を寄付で購入する等の方法が見られた。また施設(学校)内でも有志によるサークルで余暇活動としている場合は参加費を求めることもある。社会福祉協議会が主催して参加者を募る場合も助成金と参加費の併用で運営されているケースが多い。

音楽活動をおこなう施設ではとくに運営費を必要としないケースも見られた。施設主催で自主公演をする際には、音楽活動をおこなう施設ではとくに運営費を必要としないケースも見られた。施設主催で自主公演をしている所は多くはないが、その場合～楽団、演劇座といったパフォーマンス集団としての活動を展開している印象を受ける。また、近隣の施設や社協、行政、きょうされんなどのネットワークで一つの公演を市民ホールでおこなうもの、「糸賀一雄記念賞音楽祭」のように滋賀県下の関係施設が集まっておこなうものがあった。

一つの施設で発表を行おうとする場合、ホールでの発表と言うよりは、単独ライブ、他施設訪問となっているようだ。

施設(学校)事業費	101
助成金・補助金	22
寄付	13
参加費	31



## 2. 設立目的・経過／追跡取材事例

設立目的と経過についてはすべて取り上げられないが、上記設問への考察で述べてきたことを参考にされたい。また一例として8事例をあげている。

今回の調査から、すでに何らかの活動をしている箇所からのピックアップをし、委員による選定をおこなって追跡取材した。その選定基準には、福祉現場という基本的な軸はそのままに広域な視点を持ちユニークな活動・発表を行っていること、見る側に発想の転換をせまるようなもの等が含まれている。それら事例には生活の、就労支援の、学校という場所のプライベートもパブリックも内包する場所でのやりとりから生まれ、見届けられてライブになることを端的に示している。

## 3. 残される課題として

今回の悉皆調査では、身体表現やライブなどをやってみたいが情報が無いのでむしろ教えて欲しい、設立して2年が経ち、やってみたいと思っている、など現在は取り組めていないものの、非常に高い興味を示されていることがわかった。2月におこなった公開研究会でもフロアから「やりたいけれど、誰に頼んで良いのか、どのようにとっかかりを持ってよいのかわからない」という声があった。たとえばダンサーや音楽家たちとの協働関係を持つには、異文化とも言われる人と人と場所、それぞれのニーズを今後どのようにつないでいくか、コーディネートの実用性があるだろう。また、本調査が一契機となればと考えている。

# 追跡調査

## 追跡調査をするにあたって—その経緯と考え方—

すでにその調査概要を報告したように、本研究において初めて、関西エリアの障害者福祉施設、特別支援学校、社会福祉協議会を対象にして、アウトサイダーライブの悉皆調査を行ったわけであるが、この調査において回答されてきた用紙には、単に統計を取るだけではもったいないような具体的な記述や添付資料など興味深い点が多くあったため、さらに担当委員が追跡調査することとなった。

そこでまず担当委員が、より詳しく知りたい、追跡してまとめたいものをピックアップした。そして、そのピックアップ事例のうちから、委員会で議論しつつ、時間的制約のなか担当委員が実際に分担すべきものを抽出して調査したものが以下の事例である。

この追跡調査をしようとした事例の特徴（どうしてこれらの事例を抽出したのか、という基準的な考え方）は、まず、ジャンルとして、美術や工芸（だけ）ではなく、ライブもの～実演芸術（パフォーミングアーツ）はじめ多様なジャンルの発表会やワークショップなど～を行っていることが前提である。つまり、音楽、演劇、ダンス、大衆演芸、伝統芸能、各種ショーなどが具体的にはこのアウトサイダーライブであり、その前提に立って、その内容に特色があったり、前年の調査（第8回全国障害者芸術・文化祭滋賀大会記念図録集『アウトサイダーライブ』）などではあまり取り上げられなかったりしたものなど、その内容がユニークなもの、あるいは新鮮なものなどが対象としてピックアップされた。

さらに、その発表などの方法に工夫があったり外部との接点を広げ障害者の自立とも関わったりするもの、あるいは、外部のアーティストとの交流に積極的である事例が注目された。すなわち、単に定期的な発表会として義務的に行っているものではなく、何らかの企画意図があり、福祉的教育的意図だけではなく、そこでライブとして表現することについての何らかの芸術的な意図や社会的な関わりが感じられるものを含むよう心がけた。

そのなかで地域的、ジャンルのバランス、対象施設（組織）のバランスなどを配慮しつつ、実際の制約もあって、以下の事例を追跡調査としたものである。

なお、事例8（特別編）は、悉皆調査の対象でない施設（組織）であるが、アートNPOとして、障害のある人たちやその介護者などとダンサーとのワークショップと上演事例として委員たちが関心を持っている事例の一つということから取り上げたものである。

## (1) Dance & People ～ ひととダンスの縁結び～

Dance&Peopleは「ひととダンス縁結び」をモットーに障害のある人となない人が一緒に参加できるダンスワークショップを行なう任意団体です。多様な身体の出会いとやりとりの場づくりを求めて、2001年10月から京都を拠点に大阪や尼崎などでもワークショップを開催してきました。対象は、障がい（視覚・知的・身体）をもつひと、親子、高齢者、また介護者・支援職とバラエティに富んでいます。また、※エイブルアート・オンステージにも、1期では視覚障害を持つ人と晴眼者によるダンス公演「見える人・見えない人・見えすぎる人」（2005）、3期では「しでかすカラダvol.1～3」（2007）と題して視覚・知的・身体障がいなどの参加者がそれぞれアーティストと共同でワークショップを重ね、ソロダンス公演を行いました。2008年には「ダンスと見えないこと」をテーマにパリで現地の※NPOacajouと交流・パフォーマンスも敢行。2009年には介護者のからだに特化した講座「みる・きく・かかわる」「介護はダンスだ!？」「わたしのためのカラダの時間」をひらいて、自分のからだに向き合うこと、かわりから気づくことを提案しています。

代表の五島智子さんは、舞踏グループ白虎社に所属し、ダンサーとして活動された後、介護・介助の仕事をする過程で、Dance & Peopleを設立。コンテンポラリーダンサーとともに企画・コーディネートをされています。その経緯や取り組みについてお伺いしました。

### ー活動が始まったきっかけについてお聞かせ下さい

端的に言うと、「ダンスをやっていた人間として社会で何かしなくちゃいけない」と思ったことです。私は94年に白虎社が解散するまで13年間、ダンサーとして舞台のことばかり考えて暮らしていました。解散後は全く別の仕事をいくつかしていましたが、ちょうど立て続けにオウム事件、神戸の少年事件など世間を震撼させることが起こり、カルチャーシ



ョックのような状態に陥ったんです。「これはもうやばい」と。自他を尊重すること、突き詰めれば、生身のからだのリアリティを取り戻すことの必要性を痛感したんです。それで99年くらいから色々なダンスワークショップを受け始めたのですが、参加したワークショップでコミュニケーションの難しい障がいをもった人とペアになった時に手も足も出なかったことがあった。元プロのダンサーであるのに、これはどういうことだろうと。ヒントを求めてあちこちに出かけ、ダンスルポ（ワークショップ記録）をつけ始めたりして、だんだんと福祉現場の人やダンサーと繋がっていきました。

2001年からは重度の脳性マヒの方が立ち上げたNPOで働くことになり、はじめて本格的な身体介助を経験して、これはケアする側とされる側の共同作業、“ダンスのデュエットそのもの”だなと感じたんです。介護は本当に細かなことを覚えなくてはいけないし、それはダンスの細かな振りを覚えることのようにも思えました。それに介護労働そのものの大変さも痛感したんです。お互い逃げ場がないというか。される人にもする人にとっても良い介護ができるには何が必要か？と考え、まず介護者自身のからだを見つめることが大事なのではと思い至り、2002年に「介護はダンスだ!？」を始めました。これがDance&Peopleの一番最初の企画です。



—Dance&PeopleのWSには様々なメニューがありますが、どのように決めているのでしょうか。

Dance&Peopleは、はじめから介護や障がい念頭に置いていたわけではなくて、出会いとそのニーズに合わせてあたらしい企画を作るという風にここまでやってきました。自分の強烈な実感から、いろんな相手との関係性や自分自身の状態をどう保つのかということを考える一つとして、たまたま最初のテーマが介護だったということなんです。その後は、実際に「介護はダンスだ!？」に来てくださった看護師さんで発達障害のお子さんをお持ちの方の「こどもが踊るのが好きで」という話から、育成学級児を対象にした「からだをつかってあそぼ」（2003）が生まれたり、



ダンサーの友人からの縁で大阪ライトハウスでのリハビリプログラムが始まってことからワークショップ「見える人・見えない人・見えすぎる人」に発展したりとかたちは様々です。知的障がい者のファッションショーを手伝ったり、ダンサーが出産したことで親子のワークショップをしたり…。それぞれのダンサー固有のものをどのように展開できるか、どう

場所をつくっていくか、または場に合わせるかなどを一緒に考え、環境を整える役割を私が担っています。

## 一活動を続けられている決め手はなんですか。

縁で繋がってきたからですね。日々の暮らしのなかで出会うからのリアルな感覚や実感に惹かれ動かされているのだと思います。それは、誰もが人生のなかで体験する、人の生死／病／妊娠／出産／子ども／老い／介護／のようなものだけれど、ダンサーはそれについて身体として客観的に見る、面白い視点があって、その視点が企画に結びついてきています。私自身、舞台に立っていた頃は日常と非日常のやりとり・行き来が中心だったけれど、ワークショップはその中間で、より暮らしに近い実感から出発でき、そこにいる人（参加者）の生活から出てくる動き次第で、コミュニケーションにも舞台にもなる面白さがあります。

また、規模とか形式にこだわっていないことがフットワークの軽さと言えるかもしれません。どの場所でも、参加者が変わっても、それはそれで可能だからです。つまり、



一アーティストの個性とそこで出会う人たちの様々な個のやりとりが固有であること、二度と同じワークショップは生まれにくいこと、その場に立ち会えることでしょうか。

それは逆から見れば、多様な、異なる身体に出会いたいという、ダンサー固有の欲求を満たすだけのように思われるかもしれません。

しかし、そういう本気さがなければ続かない。

公共福祉という視点からすれば、アーティストの立ち位置はズレているかもしれないけれども、ズレを意識しつつ、その時に、その場で何が共有できるか。こういうことを探り合っこそ新しいものができるし、違うものがぶつかるときに発見や捉え直しがあるのだと思います。

## 一課題についてお聞かせください。

広報活動です。いくら現場そのものが面白くても、美術のように作品が残らない個人的な体験なのでうまく伝えられないことが多くもどかしい。客観的なレビューを書いてもらうことが大事かなと思っってますが、それをどういう媒体にのせて伝えるかが問題。またワークショップはオープンスペースで開く以上、そこに来てもらわないといけないけれども、本当に必要



なのは来られない人たちなので、ワークショップのスタイルにも工夫が必要になってきます。施設や事業所にアウトリーチするとしても、受け入れてくれる現場や要望を拾っていくにはまた違ったコーディネートが必要になりますし、そういう情報を共有できるような、福祉現場の求めていることをしっかりと拾い上げていけるような横のつながりがほしいところです。

あとは運営資金の調達です。助成金申請も数を打たないと当たらないわけで、助成金ありきではないところで、工夫し展開できるかが今後の課題です。また、さきほどのアーティストの立ち位置や後継者を育てることも関係して、一部のダンス愛好家以外の人にどう自分のスタンスを見せていくか、なぜ社会に必要なのかをそれぞれのダンサーも意識して活動できるか、「アーティストの社会への意識」がより重要になってくると思います。

#### — 今後の展望、これまでやってきての思いなどを教えてください。

そのときの固有の出会いがいかに大事か、につきますね。本当に色んなからだに会うことはその人の生き様に会うことなんだと、いつも触発されます。これからは福祉現場との協働をどうやっていくかをずっと考えていきたいです。現場の疲弊も聞



きますが、だからこそもっと自由に別の回路を持っていいと思います。そこで支援する、されるの二極じゃないところでふと何かを見つけていく、新たな関係性が再構築されていく可能性があるのではないかと思います。それはアーティストのような専門家じゃないとできないのではなくて、スタッフがやれるように育てばそれはそれでいいし、職員さんや利用者さんやその家族を含めて、福祉現場の人がもともと持っている

力を引き出す、手伝うのが私たちの仕事かなと思っています。

#### < 団体連絡先 >

名称：Dance&People（任意団体）

住所：〒602-8162京都市上京区東神明町270-8-3F

担当者名：五島智子（代表）

TEL & FAX：075-802-9060

Email：d-a-p@muse.ocn.ne.jp

URL：D&P blog [http://blog.canpan.info/d\\_a\\_p/](http://blog.canpan.info/d_a_p/)

## (2) NPO法人さをりひろば「キンキ雑楽団」

NPO 法人 さをりひろば は、個性を尊重する新しい手織り「さをり」の活動を通して、障害者や高齢者ほか、社会的に弱い立場の人々の社会参加や生活向上に寄与することを目的に、1982年阪に設立されました。（1999年4月に特定非営利活動法人に認証）

また、さをりひろばのメンバーが不定期的に開催するさをりファッションショーと連動して、1998年に音楽集団「キンキ雑楽団」（下「キンキ」と表記）が結成されました。今回はこれらの活動の中心メンバーであり、さをり織りの教室運営やキンキのコーディネーターも務めておられる伊藤すよこさんにお話を伺いました。

### ー活動が始まったきっかけについてお聞かせ下さい。

1998年に開催された長野での冬期オリンピックの際に、世界で初めての「アートパラリンピック」が同時開催されました。NPO法人さをりひろばは、スタッフ、さをり織仲間とともに、ファッションショーと展示会を披露するため、その催しに参加したのです。さをりひろばは、外国人アーティスト受け入れ団体として登録。肢体に障害のあるアフリカ人の方の音楽グループ担当で、すごく格好良くて感銘を受けました。もともと私自身、南米の音楽が大好きで、音楽活動を始めていました。さをりの障害者のメンバーとセッションもしていたのです。さをり織をする時と同様に練習とか訓練は、しない。

自由でやりたい事をしていい音楽。そして展示会場にて、そのアフリカ人の音楽家たちと初競演。キンキ雑楽団と名乗ったのも初めてでした。それが予想以上に好評でした。その後は、ファッションショーのみではあきたらず、それとセットで音楽活動も本格的に開始したのです。これがキンキの結成エピソードですね。

### ー活動を継続する決め手についてお聞かせ下さい。

さをり活動の本部は、NPO と会社法人があるのですが、そこで障害者自立支援法の「就労継続援B 型」に申請し、認定を受けてます。さをりひろばスタッフの城哲也氏がキーパーソンで、煩雑で膨大な量の書類申請を一身に引き受けてやってこられたことが大きいですね。キンキの活動もさをり活動の分室という形で認定がおりました。実際、キンキの主な活動拠点はさをりひろばから離れ、私の個人アトリエである「アトリエSUYO」になっています。私自身がさをりひろばのスタッフという立場を離れ、一度南米に渡り、そして大阪に戻ってから独立をしたので、今はさをりひろばと上手く連携を取りながら協働しています。あと、活動を続けるにあたって、世間からの評価が高くなってきていることも励みになりますね。さをり織創始者の城みさをさんから「音楽も踊りもSAORI織のように彼らの純粋な直感の働きである」と絶賛いただきました。また1999年には、大阪府青少年育成財団の「大阪やんちゃ大賞」の奨励賞を受賞し、イギリスの大英博物館BPシアターで行われたジャパニヤイベントにて演奏をするなど、大きな舞台に出演する機会も増えました。また沢山のサポートミュージシャンの方が活動を支えてくださっていることも本当に大きいですね。（最初のサポートミュージシャンがデビュー前のギタリスト押尾コータローさんで

した。彼は、プロデビューまで2年間ほど、ボランティアで演奏に駆けつけて来てくれました) 2002年にファーストアルバムをリリースした後も、初期のメンバーからほとんど変わることなくなんとか活動を継続できています。

ー課題はについてお聞かせください。

活動するメンバーをどうやって増やすか、広げるかということが課題です。学校講演の機会などを頂くことも増えているのですが、まず親御さんにどうやってこの活動の意義を言葉で伝えるか、悩みます。また、これは大変シビアな問題なのですが、親御さんの経済力や文化に対する深い理解がないと、どうしても活動に参加し続けることができない子が出てきます。つまり障害のある子を持つ親御さんの間にも、様々な格差があるということです。比較的、キンキに参加している子は、そういう意味では経済的にも比較的裕福な家庭で、何より親御さんからしっかり愛を注がれている恵まれ子どもたちと言えるかもしれません。しかしながらそういった子どもたちだけでなく、もっと色々な子どもたちに活動を広げていきたいと思っています。

ー今後の展望についてお聞かせください。

今年(2010年)の6月に、障害のある人の芸術活動支援団体「VSA(ベリー・スペシャル・アーツ)」(本部は米国ワシントン)のイベントにファッションショーと音楽で出演の打診をしていたのですが、OKの通知が来ました。キンキのメンバー10人くらいで行きたいですね。今のメンバーの親御さんには、海外公演の理解をいただいているので、すごくありがたいです。私達の役割をしっかりと認識して楽しい思い出を残せる演奏旅行にしたいです！！

<団体連絡先>

名称 アトリエSUYO & キンキ雑楽団オフィス

住所 〒537-0024 大阪市東成区東小橋1-2-16

担当者名 伊藤すよこ TEL : 06-6972-5855

MAIL : zatsugakudan@gmail.com

URL : <http://www.geocities.jp/suyoko217/> (アトリエSUYO)

<http://www.sun-inet.or.jp/~ken-pal/index1.html> (キンキ雑楽団)

### (3) 滋賀県立八日市養護学校の卒業生が中心のサークル活動

#### 「ドンマイ音楽サークル」

滋賀県立野洲養護学校は昭和44年肢体不自由単独校の滋賀県立養護学校として創立し、昭和50年滋賀県立八幡養護学校と校名変更されました。平成20年八日市養護学校、草津養護学校との校区再編により、八幡養護学校が移転、名称変更され、それまでの肢体不自由単独校から知肢併置校となりました。今回は、校区再編前より八日市養護学校で活動されている「ドンマイ音楽サークル」について、活動に携わっておられる野洲養護学校の垣内誠教諭、生活指導の寺田伸一教諭にお話を伺いました。

#### ー活動が始まったきっかけについてお聞かせ下さい。

ドンマイ音楽サークルは、卒業生対象の余暇支援、青年学級的な活動として始まりました。ギターやベースギター、ドラムスで編成されたバンドが演奏し、流行歌など好きな歌を歌い、月に一度の例会を設け、楽しんでいます。この活動は卒業生が月に一度集まれる場となっており、結果的に社会に出た卒業生の余暇支援へと繋がっています。東近江地域障害児・者サービス調整会議主催の「東近江よかよかまつり」に出演するなど活動の幅も広がってきています。

#### ー活動を継続する決め手についてお聞かせ下さい。

前の赴任校で、生徒と組んだバンド活動(現在も継続中)を振り返り、「学校行事だけでは広がらない。新たな出会いや繋がりは生まれたい」と感じました。そこでバンド活動を積極的に、対外的に展開していったのです。ドンマイ音楽サークルも「ブレーメンライブ」と題したライブイベントに参加しています。「ブレーメンライブ」と名がついた理由は、養護学校卒業生の活動枠からステップアップを目指したからです。現在、ドンマイ音楽サークルは教員と寄宿舎の指導員である5名の有志が活動を支えています。

#### ー課題はについてお聞かせください。

八日市養護学校の取り組みとして、高等部に美術のクラブ活動があり、自主通学者対象に週2回活動をしています。しかし在校生全員への取組となると、送迎のスケジュール等、条件的にはかなり難しい状況にあります。美術のクラブ活動が実現しているのは、美術教諭の存在が大きく、パフォーマンスアーツに関しては、専門的な知識がないので活動がまだまだ難しい状況です。また、教員は通常業務だけでも本当に忙しく、教科書のない指導を行う上では一日一日が実践と振り返りの繰り返しです。放課後になってもそれらの振り返りミーティングに時間が割かれることがほとんどです。放課後のクラブ活動の実践が難しい理由はここに 있습니다。なかなか時間が取れないのです。

殆どの子どもたちは、学校が終われば家に帰って過ごすことが多いです。地域にこうした活動ができる場があればと心から思います。授業の中での取り組みとして行う

ことについては、やはり学習指導要領に則り、評価を行わなければならないので、指導要領の範疇を超えた、特にパフォーマンス系系の授業を行うためには、様々な準備が必要となります。学校職員の共通理解、保護者の理解が最も必要でしょう。

－今後の展望についてお聞かせください。

ドンマイ音楽サークルの他にも、肢体不自由のメンバーも加わる「バナナバンド」や、日本舞踊「藤娘」を踊る高等部生等、地域には質の高い表現者達が存在します。だからこういった人達皆が集まってお祭りやライブイベントを開催することができればいいと思っています。

<団体連絡先>

名称 滋賀県立野洲養護学校

住所 〒520-2301 滋賀県野洲市小南588

担当者名 寺田伸一

TEL : 077-586-6850 FAX : 077-586-6870

URL <http://www.yasu-sh.shiga-ec.ed.jp/>

#### (4) 社会福祉法人育夢（はぐくむ）「糸をかし」

大阪府豊中市にある通所施設 社会福祉法人育夢（はぐくむ）「糸をかし」は、授産活動の一環として表現活動に取り組んでいる施設です。法人設立の前から行う表現活動は、15年間継続して行われています。大津プリンスホテルにて開催した公開研究会に積極的に参加された施設職員の河北英一さん。「積極的に動くことで、専門家や支援者、様々な出会いが生まれ活動が支えられてきました」と話す河北さんにお話をお伺いしました。

##### ー活動が始まったきっかけについてお聞かせ下さい。

1995年に無認可の福祉作業所として活動を開始した当初から、プロの指導のもと人形劇をスタートさせました。代表の西口敏江が人形劇の活動をしていた関係から、西宮小夜子（人形劇団ねぎぼうずSAYO）さんと出会い、人形作り、脚本、演出、と細かくご指導をいただきました。私が加わったのはその2年後の1997年です。翌年1998年には「障害者と芸術の可能性INおおさか」に参加し、その翌年1999年には自主事業として「素のまま・そのままフェス」が開始しました。2000年にNPO法人パコ（パフォーミング・アーツ・コーポレーションおおさか）を設立し、吹田人形劇コンクールにエントリー、敢闘賞を受賞するなど、積極的な表現活動を行なっています。2003年には社会福祉法人育夢を設立しました。



##### ー活動を継続する決め手についてお聞かせ下さい。

糸をかしの表現活動は、「人形芝居 ぬくぬく座」と「ちんどん屋 てんてこまい座」の二つです。双方とも一般からの公演依頼を有料にて受け付けていることが大きな特徴です。表現活動を仕事にしている、いわばセミプロといえます。1回3万円の公演料を20人で分ける。本年度（2009年度）は市の協力を得て、保育所、幼稚園、小学校などの教育現場に巡回公演を行い、ちんどん公演と合わせて公演数は50回程になります。この表現活動が、余暇支援でもなく、自立支援でもなく、活動、仕事として位置づけられていることは全国でも特異な例ではないかと思えます。彼らの面白いところを最大限引き出す脚本や演出。「見せる/見られる」関係の中で表現の質を高め、公演を重ねる過程で、アーティストや支援者との様々な出会いがありまし



た。チンドンのセミプロが練り歩きや音楽、メイクを指導など。こうした出会いが活動を支える大きな力とり、「これは必ず仕事になる！」そう思う契機となりました。「仕事にすること」ここが継続の決め手と言えます。

また、このような活発な活動を行うことにより、パントマイムや演劇などパフォーマンス・アーツの経験を持った若いスタッフが入ったりするなど、現在のところスタッフも充実してきたので外部から特別な指導者を呼ぶのではなく、全員（出演者、職員）で作品を制作する体制になってきています。

#### 一 課題についてお聞かせください。

仕事として位置づけて行ってはいるものの、あくまでもそれは福祉的な仕事です。公演料で生活を保障するにはまだまだ至りません。福祉サービスの範疇の中で行う表現活動に、ある部分限界を感じています。また、今年のように多い時には1週間に2度の公演ペースとなってくると、本人達の体力の限界を感じます。あるいは家族の意識（活動の意義）にも限界を感じてきています。



#### 一 今後の展望についてお聞かせください。

こうした課題、様々な課題を乗り越えていくためにも、「福祉の枠から外れて、表現専門のプロダクションを作ってみては？」と考える時もありますが、現在のところ、作品の質を高め、本人達のペースも考えつつ公演形態をグループ化して、公演依頼の拡大に向けて幅広い対応を目指したいと考えています。

#### < 団体連絡先 >

名称 社会福祉法人育夢（はぐくむ）「糸をかし」

住所 〒561-0857 大阪府豊中市服部寿町3丁目18番12号

担当者名 河北 英一

TEL 06-6868-2153 FAX06-7172-4912

Email

itookashi@s9.dion.ne.jp

URL

<http://www.xn--y8jb6g0c.jp/>



## (5) 社会福祉法人上牧町社会福祉協議会「遊びに行こう」

社会福祉法人上牧町社会福祉協議会が実施する考える会「遊びに行こう」は、奈良県北葛城郡の上牧町と河合町のふたつの地域をエリアに、両町社会福祉協議会が連携し、2003年に発足、過去2回のファッションショーを開催してきました。

2004年、親や支援者が中心となった第1回目を開催し、その後出演した障害のある人たち本人から「またファッションショーをやりたい」との希望が出てきました。その流れをうけ、2005年以降、彼ら彼女らが企画段階から参画できる取り組みとして、毎月1回継続しています。今回はこの取り組みを担当されている植村隆弘氏にお話を伺いました。

### —活動が始まったきっかけについてお聞かせください。



当社協に育成会から「この地域で暮らしている障害のある人たちの余暇の活動をして欲しい」との依頼があり、上牧町、河合町の2町で暮らしている人たちの対象にした余暇支援事業としてスタートしました。本人たちみんなと何ができると自問自答している時に、大阪の施設からファッションショーの話をお伺い、参考にしながら2004年に開催しました。

その時には、服飾の専門学校から古着をいただいたり、たくさんの方々に支えられて、開催できました。その時に参加した本人たちからの要望で自らが企画などに参画し2006年移行は継続して開催しています。

### —活動を継続する決め手についてお聞かせください。

本人たちの「自らを表現したい」との希望が強く、第2回目のファッションショーは「ウェディング」をテーマに開催することができました。関西電力や高島屋をはじめブライダル会社などの協力もいただき、ちゃんとファッションモデルとして見てもらうため、資生堂からメイクやカラーコーディネイトへの協力をしてもらうことができました。また、ダンスの専門家に、ショーでのダンスやウォーキングなどの指導もしていただき、「自らを表現したい」という気持ちを実現させました。その後は本人たちの「当事者会」を発足し、表現活動に限らず、個々のニーズに合った場として、様々な取り組みを月1回のペースで行っています。



—課題についてお聞かせください。

ファッションショーを開催した頃は、社協にも運営資金として事業を進めていくだけの体力があり、関西電力、資生堂、ブライダル会社、高島屋、装飾関係の専門学校などとの連携も取ることができ、より専門的な人たちと関わりながら開催することができました。しかし、現状ではやはり運営資金の課題が大きくなってきており、ファッションショーなどの大きなイベントは事業としての定着が難しい状況です。地元の企業や店舗などとこれまでよりもさらに突っ込んだ形で、良い協力関係が築くことができればと考えています。

—今後の展望についてお聞かせください。

現在は、町内の写真クラブとの連携により、写真展を開催したりと、文化活動も継続して行っています。参加する個々のニーズ（思い）を大切にして、自己実現、自己表現できる場として、継続していきたいと思っています。本人たちの「またやりたい」という意識を大切にしながら、その時に見せた堂々と自信に溢れた顔を考えると、今後も広がり求めて事業を進めていきたいです。



<団体連絡先>

名称：社会福祉法人上牧町社会福祉協議会

住所：奈良県北葛城郡上牧町上牧3245-1

担当者名：植村隆弘

TEL：0745-76-6098 FAX：0745-79-0895

E-mail：kamisha. uemura@gmsil.com



## (6) 大阪市旭区社会福祉協会ボランティアビューロー

### 視力障害者ダンスサークル「アイ」

大阪市旭区社会福祉協議会のボランティア活動支援事業 ボランティアビューローから生まれた「アイ」は、視覚障害者の体力づくりと交流の場づくりを目的にした社交ダンスサークルです。

週1回のレッスン、年2回のダンスパーティをレギュラー開催しながら、すでに12年間も活動してきたベテランサークルの活動について、主宰の黒川愛子さんに伺いました。

#### ー活動が始まったきっかけについてお聞かせ下さい。

もともと大阪市旭区のボランティアビューローにて、視力障害の方のガイドヘルプ（手引き）をしていたことがそもそもの発端です。視力障害の方はついつい自宅に引きこもってしまいがち。実際、お一人暮らしの方を手引きする際に、外に出るのが不慣れなため、私にすがりつくように歩き出すということもありました。なかなか外を出歩かないのでより一層外に出られなくなるといった悪循環に陥ります。視力障害の方が、もっと晴眼者と同じように社会で活動できるようになるにはどうすればいいか。

とりわけ女性は化粧をしたり、綺麗な衣装を着たりすることで、もっと自分を飾って見てもらえる喜びを感じてもらいたい。「どうせ自分が見えへんから何をしても同じ」と思っている、やっぱりお洒落をして素敵になるという能動的な思いはあるはずなんです。そこをうまくサポートできればと思うようになりました。また男性は、堂々とまっすぐ歩けるようになることで、自分に自信を取り戻し社交性を身につけることが必要だと感じました。そこで、もともと私自身が長年やってきたダンスの活動と視力障害の方のサポート活動を結びつけました。そこでボランティアビューローの方にも色々興味のある方に声をかけていただいて1998年に、ダンスサークル「アイ」として立ち上げたのです。

名称の「アイ」は目の「eye」と愛情の「愛」、そして私の名前が愛子なのでその「愛」とを掛けあわせて決めました。

#### ー活動を継続する決め手についてお聞かせ下さい。

メンバーの喜ぶ顔をみれることがなにより嬉しい。がんばればなんだってできることを喜んでもらいたい。基本的にはその思いがあって継続できています。

また、活動を続けているうちにマスコミによく取り上げられるようになりました。「視力障害者が取り組める本格的なダンスサークルがあるらしい」という噂が広まるにつれて、全国から参加希望者が多数訪れるようになったのです。これには理由がありました。アイを立ち上げた1998年当時も全国にいくつか視力障害者のダンスサークルはあったのですが、そのほとんどが当事者自身が運営するものでした。

一方、アイは支援者であるボランティアが立ち上げた団体だったことも特徴的であり、単に楽しくやるだけでなく、表現としてのレベルも上げ、そしてより社会に開かれていくことを重視していたのです。だからこそ、そのコンセプトに共感してくだ

さった方が多数訪れてくれているのだと思います。ボランティアの方は様々な社会活動やダンスパーティーでの人脈を持っているので、視力障害のある方を違った世界に誘うことができます。多少摩擦が起きるとしても、最初から晴眼者が関わっている世界に参加してもらうことが重要だと思っています。それに、視力障害の方に中にも、非常に高い表現レベルを目指している方が存在するので、そこは一切手を抜かず本気で指導しています。成長すればするほど、もっと頑張ろうと思える気持ちも継続の秘訣ですね。

#### ー課題はについてお聞かせください。

活動拠点にかかる費用面が課題ですね。もともとはボランティアビューロの事務所で練習をしていたのですが、手狭になったこともありそこを離れることになりました。現在は両国人権文化センターにて毎週月曜日活動しています。当然会場費が多少なりともかかるので、メンバーから月4回のレッスンで1000円頂いてます。また助成金も3年度分いただいています。広い会場を借りたくはなりますが、広さを求めれば求めるほど適した会場が見つげにくくなります。

また、ボランティアさん集めもなかなか大変です。現在10名ほどのダンスができるボランティアさんに関わってもらっていますが常に現状を維持し続けるのは難しい。しかも誰でもいいわけでもない。

視力障害の方と踊れるボランティアさんっていうのは実はすごくダンスレベルの高い人なんですよね。また、とにかく優しく踊れることが大事。そしてどうしても社交ダンスの性質上、男性のボランティアが多く求められます。男性がうまくリードして成立する部分が大きいからです。

#### ー今後の展望についてお聞かせください。

レッスンとあわせて、毎年2回のダンスパーティーも開催しているのですが、昨年からは会場にメイクコーナーとヘアコーナーを設置しました。どんどんお洒落になって自分をアピールしたいというメンバーの欲求を叶えるために。初期のパーティーは50人規模だったのですが、現在は300人程までに拡張しています。

また、今年は大阪市ボランティア情報センターのネットワーク「Com link・こむりんく」にも登録して、企業や各種支援団体さんにもアピールをしていきたいですね。例えば化粧品メーカーさんからの商品協力や会場協力など。そういった様々な情報発信にも力を入れていきたいです。

#### <団体連絡先>

名称 旭区ボランティアビューロ

住所 〒535-0031 大阪市旭区高殿6-16-1 旭区在宅サービスセンター内

TEL : 06-6957-2200

MAIL : furatto@sansan-asahi.or.jp

URL : <http://sansan-asahi.or.jp/volunteer-main.html>

## (7) 社会福祉法人かがやき神戸「ぐりいと」

「ぐりいと」はクラウン（道化師）活動を展開している神戸市北区の就労継続支援事業B型通所施設です。主眼1994年に「つくしんぼ共同作業所」という無認可作業所からスタートしました。しかし翌年おこった阪神大震災で無認可の脆さを痛感。障害者の命と生活を守ることでできる基盤をつくろうと、西区の精神障がい者作業所と協働して1999年に社会福祉法人かがやき神戸を設立しました。「つくしんぼ」は2002年に知的障害者通所授産施設に、2009年に就労継続支援事業B型に移行して「ぐりいと」となっています。今回は職員の山本喜代巳さんにクラウン活動についてお伺いしました。

### ー活動が始まったきっかけについてお聞かせ下さい。

きっかけは2006年の障害者自立支援法です。震災後、やっと軌道に乗ったかという時で、職員を削らないといけなかつと思うくらい運営に不安を持ちました。その時はなんとか乗り切ったけれど、今後は方針を変えてゆかなくちゃいけない、積極的に打って出ないと障がいのことを理解してもらえないと考えました。施設運営に関しても財政事業委員会をつくり、起業家さんに相談したりするなかで、クラウン活動を



教えてくれる人がいる、と紹介してもらったことが始まりです。「クリニックラウン（※病室を訪れ、遊びやコミュニケーションなどを通じて心のケアをする専門クラウン）はあるけれど、障害のある人自身がやっているのは見たことがないし、面白いかもしれない」という提案でした。しかし当初はクラウンそのものもよく知らず「道化師？メンバーさん達に？」と、あまりプラスのイメージじゃなかった。悪くいえば見世物的になるのではないかという心配が職員や親にもありました。でもメンバーや職員、ボランティアさんにもやりたいという人がいたので、もし依頼があればやりたいなあ、



くらいの気持ちで、有志によるサークルとしてスタートしました。ところが、蓋を開けてみると、それまでなかなか就労に向かなかつた、来られない、遅刻しちゃうなど、作業所での仕事に乗り切れないメンバーたちが率先して、自分から出演することを楽しみにしてクラウン活動の練習に来るようになっていた。それに、最初は物珍しさもあつてか、意外と

様々な場所に呼んでもらいました。

#### ー活動を継続する決め手についてお聞かせ下さい。

クラウン活動を就労継続支援事業、つまり「仕事」として位置づけていることです。

教えてもらっているプロのパフォーマー（白井博之さん）への講師料のことも考えると、1事業として運営していくことが必要でした。サークルでもいいけれど、責任感・社会性を持つことを意識するためにも「仕事」という捉え方がフィットしました。その背景として、何よりメンバーさん達がいきいきと元気になっていることが大きくあります。



またクラウンというのは、“キャラクターディベロップメント”をす

ることも重要です。クラウンは失敗をプラスに、笑いにしてしまえる利点があります。技術が高いことだけが必要ではなく、練習のなかでの失敗も発想の転換でプラスにしていける、肩の力を入れずにがんばれるという特徴がメンバーにピッタリなのだと思います。加えて、クラウンはショートコントの集合体でもあるので、作りやすさ、練習しやすさもあります。もちろん基本には見てもらえる・出演することの楽しさがあり、メンバーたちは自分たちで作っていく仕事という意識のもと、ほぼ毎日自主練習をしています。その甲斐もあって、今では、社協関連のイベントや特別支援学校、企業のパーティなど、年間30回の依頼出演、静岡での大道芸ワールドカップ、オフ部門にも出演、ホールでの公演を2回行っています。

#### ー課題についてお聞かせください。

お給料をもっと上げたいということと、練習する場所についてです。

プロの仕事としてやっているのでも練習にもお給料が発生しますし、出演時は別の料金体系をとっていますがまだまだ少ない。講師料もかかり、採算が合うというわけではないので、法人のシンボリックなものとして法人全体のなかで支えてもらっている現状があります。また、練習場所としてももう少し広い場所が見つかればと思っています。

#### ー今後の展望についてお聞かせください。

今までは物珍しさで出演依頼があったかもしれないですが、今後はプロとしてきちんと見せられるレベルのものを作らないといけない。職員としては、思った以上の縁をつれてきて、価値観も広げてくれる、将来性のある活動だと思っています。有名になりたいというよりは、「神戸に行ったらあの人たちがいる」という風に地元に着した形で発展していければと思っています。

<団体連絡先>

名称：社会福祉法人かがやき神戸「ぐりいと」

住所：〒651-1213 神戸市北区広陵町6-173-1

担当者名：山本喜代巳（サービス管理責任者）

TEL & FAX：078-581-8915 fax: 078-581-8916

Email：確認中@kagayaki^kobe.jp

URL：[http://www.kagayaki-kobe.jp/doyoubi.html\\_\\_](http://www.kagayaki-kobe.jp/doyoubi.html__)



## (8) 社会福祉法人ポポロの風 里の風「劇団ドロップ」

社会福祉法人ポポロの風が運営する「里の風」は、1990年代から3つの小規模作業所を運営され、2004年5月に3作業所を統合して、定員40名の通所施設として創設されました。脳性麻痺など全身性の障害のある人たちも通う施設で、どのような活動を展開していくかを考えた時に「書」「絵画」そして「演劇」などを取り組む文化芸術に特化した「文化芸術創造工房」を、「ケーキ工房」、農作業などの「手作り工房」とあわせて実践することとなりました。演劇活動を行うグループ『劇団ドロップ』は、これまでに4つの演劇作品に取り組み、上演してきました。今回は理事長の樋渡和敬氏にお話を伺いました。

### —活動が始まったきっかけについてお聞かせください。

全身性の身体に障害のある人たちにとっての作業とは？という問いから、彼らが潜在的に備えている力を表現に置き換えてゆく時に、それを芸術と捉え、文化芸術創造工房という部門を設置し、「書」「絵画」「演劇」の中からの選択制で事業を始めることとなりました。また、当施設を利用される人の中には、「劇団態変」でエキストラ出演されていた人たちもいたりして、当法人の理事長



である樋渡氏が「大阪勤労者演劇協会」との関わりが強く、府内の劇団とのつながりもあったことから、専門家との取り組みでこの活動を行いたいと関西芸術座の小笠原真智子氏に月2回のペースで演劇の指導を行ってもらえるようになりました。

### —活動を継続する決め手についてお聞かせください。



プロ意識を常に持って活動に参加すること、そして、本番での強いエネルギーが彼らの継続の源にもなっています。公演時に入場料を取ることで、出演する、参加する人たちのモチベーションが高まり、表現することに対する意識が強くなってきました。4回の公演での反響もあり、参加している彼ら自身「障害があるからこそできる芝居がある」という誇りを持てるようになってきました。

### —課題についてお聞かせください。

プロとしてやっていくためには、芝居の質も上げていかないといけないし、以前公演した演目をいつでも上演できるように質を保たないといけないと思っています。また、施設で

ある以上、この活動に関わる職員の配置について、異動等があるので、例えば、芸術系の学生などに舞台周りのお手伝いをしてもらうなど、もっと多くの外部の人たちの関わりを濃くしていきたいです。

#### —今後の展望についてお聞かせください。

障害者という枠に留まるのではなく、人間としてのひらめきと完成を芸術という内側にぶっつけていくことに、彼ら自らの自己実現を果たせたらと考えています。そして、公演に行ったり、お客さんに来てもらったりとこの取り組みを通して、たくさんの人たちが集まれる場を作っていきたいですね。またプロとして、公演や出前公演などもやっていき、その上で彼らの経済的自立に繋げられる何かを見つけていきたいですし、さらにはこのような取り組みを実践している施設や団体などとも、ネットワークを作り、お互いに情報交換を出来ればよいと思います。



#### <団体連絡先>

名称：社会福祉法人ポポロの会 里の風 「劇団ドロップ」

住所：大阪府八尾市水越2 - 8 1

担当者名：大野木謙二

TEL：072-940-3321 FAX：072-940-3322

E-mail：satonokaze@kawachi.zaq.ne.jp

URL：<http://www.popolo.ne.jp>





## 「アートというツールで支援のいない場をつくってみよう！」現場レポート

本研究会は、2010年2月5日(金)から7日(日)、滋賀県大津プリンスホテルにてパフォーマンスアート企画「アートというツールで支援のいない場をつくってみよう」を開催しました。開催の目的は、障害者福祉の現場で取り組まれる、からだを扱った様々なパフォーマンスアートを世に広めること。

その背景には、障害のある人が地域の中で幸せな日常生活を送る上でのある問題意識が存在します。それは、「障害のある人／ない人」が「支援される人／支援する人」という固定された関係性をお互いに作り上げてしまうことです。もちろんこの関係性があることで、障害のある人の日常生活がスムーズに成り立つことも事実です。しかし一方で、この「支援」という枠組みを超えたところで、それぞれの立場をお互い認め合える自由な場が存在すれば、もっと生き生きとありのままの自分を表現できるのではないのでしょうか。その世界を実現するひとつの方法として、本研究会はパフォーマンス



アートを通じた場づくりを行うことを考え、「アートというツールで支援のいない場をつくってみよう！」の立ち上げを決意しました。本レポートではとりわけ開催前日に行なわれた「表現を最大限に活かすための空間づくり」と、「音楽家とダンサーによるワークショップ」、そしてこれらを経て完成したパフォーマンス作品の「本番公演」、この三点を中心にお届けいたしました。皆さんの関わられている福祉現場の新たな場づく

りに、少しでもお役に立てば幸いです。

### 2月4日(木)～2月5日(金)

#### 「表現を最大限に活かすための空間づくり」

天井が高いホテルの宴会場。何もない四角い空間は体育館のようにがらんとしていて殺風景である。最初に設置したのは、一家族が暮らせるぐらいの大きさの12角テント。横幕にはところどころに丸い覗き窓があり、天辺の象徴的な旗がサーカステントを思わせる。会場奥の中央に設置するよう指示を出すのは、空間演出を担当する美術家の井上信太氏。この空間の軸となるシンボリックな存在として、サファリテントと呼ばれるテントが出来上がった。不思議な空間づくりのはじまりである。

空間作りを支えるスタッフは、井上信太氏のアシスタントを勤める美術系スタッフと、アーティストの意向を確実に具現化していく舞台監督と技術者、運営全般に携わるスタッフたち総勢10名。舞台監督はホテル側と調整をとりながら手際よく作業を進行していた。

テントの横にバックヤードの枠組みが作られ、そこに帆布生地が垂らされる。空間を仕切るために、ホテルにあるパーテーションをあえて使わないアーティストの



こだわりである。帆布に額縁のような窓枠が吊るされると、かわいい建物が出来上がった。

テントや建物の前の広いスペースに、ブルーシートを切り出し、池や水たまりがいくつかが作られ、そこには、ベニヤでつくられた平面の生き物、水鳥や象が配置された。自己主張の強い宴会場の絨毯が、その存在を薄め、テントと建物の間から延びる道、池や水たまりのあるスペースはみんなが集う広場のようである。人の気配も自然の薫りも感じられる、まるでピクニック気分になるような、ホッと一息つきたくなる空間ができあがった。

空中に張られたロープが会場の左右にジグザグを描くように渡され、テントのなかには不思議な樹木、作業台とベンチ椅子兼用のカラフルなカラーベンチや果物の形のクッション、一人腰掛け用の円柱型の小さな椅子。これら小物たちすべてが不思議で楽しい雰囲気を作っている。信太氏が作った仕掛けがどれも話しかけてくる。まるで物語の中にいるようで、わくわくして子どものようにはしゃぎたくなってしまふ。

来場者も子どものように目をキラキラさせて質問する。「ここは何ですか？写真を撮っていいですか？」隣のホールでは別のシンポジウムなどが行われている中、この部屋だけ明らかに異質な空間が出来上がった。



2月6日(土)

### 林加奈ワークショップ「めくるめく紙芝居を体験する」

「やる気がないひとにも居場所があってやる気満々のひとが潰されずそのどちらでもないひとでも無視されない」アーティスト林加奈さんが掲げるテーマである。

始まる前にアーティストから「このワークショップは、画用紙や蒔絵に、参加者が今感じることを思い



い思いに描き、その絵から私が即興で物語を創り出し紙芝居にします。そしてこの紙芝居は、参加者とパフォーマンスをしながらみんなで楽しむ紙芝居です」と説明を受けた。



開始時刻の30分前。ざわめきの中ふと気がつくと、すでに画用紙何枚かの絵を描き上げ、今もなお熱心に描き

続けている女性がいた。関係者に聞くと、彼女は加奈さんのワークショップ経験者で、絵を描くのが好きでいつもとても熱心だという。絵の世界に心から没頭するまっすぐな姿。その姿を覗き込む来場者。彼女はすでにパフォーマーの役割を果たしている。彼女のパフォーマンスによって生まれた風が、全員を創作の世界へと急速に誘ったのではないかとも思えた。

みんなが絵を描いているおおよそ1時間の間、絵ではなく、楽器を周りで鳴らし続ける男性の音が突発的に聞こえてきた。音楽的な音色とは言えないが、しかしけして会場の雰囲気壊していない。

彼のパフォーマンスもまた自然とライブとして成立している。描いている人とのテンションが釣り合っているせいなのか、気持の向かっている方向が同じからなのか、全然うるさく感じないのが不思議である。

出来上がった絵が紙芝居の枠の中に続々と収められていった。その裏のメモを見ながら一枚一枚にタイトルをつけ確認しながら番号をふっていく加奈さんの頭の中には、もうすでにお話が出来上がっている様子である。参加者が描き終えて一休みする間もなく、音楽付きの紙芝居がスタートした。食い入るように観る参加者の姿に、自分の描いた作品を見守る空気が伝わってくる。一枚一枚の絵に対し、ドラマティックなストーリーが繰り広げられていく中で、参加者もいつの間にか加奈さんの導きで出演者になっている。突発的な音を発し続ける男性の音が、今度は話に無くてはならない音響効果となり、紙芝居のストーリーと一緒に盛り上げる。40枚はある大作が終わった時に、大きな拍手がおこった。その拍手は演じ手と参加者の垣根がなく、みんなが同じ



テンションで喜び、讚えあっているように見え、加奈さんの「やる気がないひとにも居場所があってやる気満々のひとが潰されずそのどちらでもないひとでも無視されない」という言葉がやっと実感できた瞬間であった。これまで起こったプロセスすべてがこのラストの瞬間に息づき、連綿とつながる妄想立体紙芝居。何もかもを受け入れる奥の深いこのワークのふくよかさを、参加者全員と共感できたように思った。

2月6日(土)

## 北村成美ワークショップ「ひとのからだをタイカンする」



前半の林加奈さんのワークショップが終わり、参加者の気持ちが少し落ち着いたと感じるやいなや、「15分の休憩後にはじめます」と北村成美さんこと“しげやん”の声が高らかに会場に響く。それを合図に会場はダンス仕様に転換された。ステージをあえて設けず会場レイアウトの自由度を高めた工夫が功を奏する。振り返るとしげやんのこの一言からワークはすでに始まっていた気がする。

はじまりの合図を告げることなく無言でしげやんが正座した。ほどなく誰となくみんな座り始め、大きな円が出来た。みんなの意識がしげやんに集中されていく。しげやんの動きが静かに広がり、波のようなうねりとなって途切れることなく変化していく。しげやんの動きを真似て拡がる動き、そして今度はしげやんが誰かの

動きに反応して次の動きへと遷移してゆく。そう、動きが動きを呼び、増幅した連なる動きとなってさらにうねってゆくのだ。しげやんのセンスであろう起承転結のあるからだの動きにナビゲートされ、思惟と直感が交差する。動きによって心が大きくなったり小さくなったり、まるで呼吸までが合わさっているような一つの大きな生命体が生まれた。からだの動きが「できる／できない」の価値で計られるワークではなく、意識をしげやんに集中したり、自分や他者やその全体に集中したりと、心の内面を表に現わすワーク。このことがしげやんのワークの特徴であると思えた。

再び、正座の円になり「よろしくお願ひします」の言葉で次のワークに移る。

「自分勝手にひとの体を触らない。人の体の通りに触る」をルールに、2人組のワークが始まった。手を繋ぐより、もっと相手の身体を感じられるように、お互いに手首の少し上を握り合い動き出す。礼で始り礼で終わる一対一のワークが、全員に巡るまで繰り返される。そんなに激しい動きをしたわけではないが、体も頭も心も全部をたっぴり使った爽快感を感じた。

「からだとからだでつながるために、相手をめっちゃ見る、めっちゃ聞く、めっちゃ触れることに挑戦します。“めっちゃ”は他人が決めたぶんではなく、相手のために、ちょっと努力したり気遣うこと



で良いのです。人は人にはたらしかけ、人とつながって初めて、じぶんのからだを知ります。その喜びは誰でも楽しむことができます。たっぷり堪能いたしましょう」これはしげやんがこのワークについて企画パンフレットで記していることだ。

このことがワークが続く上で段々と理解できてきた。からだとかからだ、心と心を感じ合うために、まずは、自分と他の人を同じように体



で認めあう姿勢が基本であること。このワークを体験して、人とふれあうということの深層に向かう入口に立ったような気がした。そしてもう一点。私たちが難しさを感じていたこのワークを、障害のあるといわれる彼らは、いとも簡単にやっていることに気づき、私たちが彼らにサポートされていたように感じる瞬間すらあった。

2月7日(日)

パフォーマンス公演「アウトサイダーライブ リハーサル 〜 本番」

朝一番に、昨日の2つのワークショップが1つの作品となる打ち合わせが行われた。

この時には、最初は様子を見ていたホテル側の音響、照明スタッフもチームに積極的に加わり、出演者を含め作品を創作する立派なカンパニーが出来上がっていた。この3日間の成果である。

加奈さんとしげやんから進行について簡単な説明があり、空間演出をさらに変えようとしているのか、信太さんもイメージを膨らませながらその話を聞いている。リハーサルはここにいる人がそれぞれに思い描いていることをぶつけてみるような、そんな気持ちのいいスタンスで行われた。



昨日のワークショップ同様、始まりの合図はなく、いつの間にか正座した出演者が車座になっている。照明が変化し、ゆっくりとみんなのからだ動き出した。動きが



少し激しくなり、ダンサーたちが紙芝居の前に座ると、昨日と同じように紙芝居が勢いよく始まった。

「紙芝居を見るお客」を演じるダンサーたち。作品を盛り上げているエネルギーが昨日とは桁違いだ。空間全体が一体感で包まれる。トーリーが進むにつれ、まるでお互いの役割や存在を確認しあうかのように、出演者だけでなく、関係者全員が同じ気持ちで作品見つめ、ストーリーに入り込

んでいることが伝わってくる。本番さながらのこの緊張感は一切どこから湧き上がってくるのだろうか。その源泉は、同じ紙芝居を毎回初めて見るかのような、「表現にまっすぐに向き合う姿勢」だ。そう気づいた時に、障害のある彼ら彼女らの絵を描いている姿、楽器を鳴らしている姿、また私に自然に話しかけてくれたありのままの姿が次々と思い出される。この空間のこの空気をつくったのは間違いなくこの人たちだと確信した。アーツというツールで支援のいらない場をつくったのは彼らであった。

予定通りリハーサルが終わって30分後、さあいよいよ本番が始まる。お客さんの中には会場づくりや紙芝居、ダンスのワークショップに参加されていた方のお顔がみられた。身内の発表を見守るかのように穏やかな雰囲気を持ちながら、初めて来るお客さんとの繋ぎ役となっていた。



リハーサルとなにひとつ変わらぬテンションで、楽しく、不思議で、パワフルで、ふくよかなライブがはじまった。そこでは、どんな物も人も出来事も自然に溶け合い、奇妙な雄叫びさえ調和していた。

障害の有無などまったく関係なく、個々としてありのままを認めあって彼ら彼女らの何もかもを受け入れるアーティストの確固たる姿勢が、アーツの本質を浮かび上がらせる。空間演出として準備したすべてのものにも相応の役割が生まれ、空間全体がお話にあわせて息をしているようだった。



すべてを受入れまっすぐに取り組むことが先端の表現を生み出す、決して新しくも特別でもないアウトサイダーライブの価値観が心に刻まれた。

西川真樹（ま〜じゅ）

栗東芸術文化会館さきらの文化ボランティアや絵本読み聞かせ、幼稚園が行う子育て支援事業などのボランティア活動を経て、「アート」「子ども」「地域」を軸にした活動を積極的に行うため、今夏を目標にアートNPO 法人ZOOの設立準備中。

## 「アートというツールで支援のいらない場をつくってみよう」

### ワークショップ&ライブ 体験コラムその1

久保田翠（NPO法人クリエイティブサポートレッツ 理事長）

2月5日、アメニティーネットワークフォーラムでは、大きなホテルの、大きな会場の中、1000人以上の参加者が熱気溢れ、監禁されているような状態の中、朝から晩まで、福祉や人権や制度について喧々諤々考え、議論していた。一方その横で、パフォーマンスアートの会場は、井上信太氏の会場構成によって、オアシスのような空間が実現していた。

京都出身のアーティスト林加奈氏らによる「めくるめく紙芝居」は、毎月行なわれているワークショップに参加しているメンバーの何人かが参加されていて、手馴れた感じで新しいお話や音楽などが生まれていく。毎月1回のワークショップは、実は参加している人が仲間と会う、知的な遊びができる場所なのではないか。そこでの障害のあるなしはほとんど関係がなく、自分にとって心地いいかが大切で、障害のある人がいてもいいなくても十分成立する場ではないかと思った。



コリオグラファー北村成美氏は、この7年間、滋賀の7カ所月2回ペースで施設の利用者や職員や支援者を対象としたワークショップを行なってきた。その参加者の一部が今回の「ひとのからだをタイカンする」にも関わっていた。私は正直、障害のある人が舞台に立つといったイメージをどうしても具体的に持つことができないでいた。

障害のある人の舞台は見ても、どんな障害のある人でも良いわけではなく、ある程度の鍛錬ができて舞台構成を把握できる力のある人が舞台に上がることができるように見えた。特に知的に重い人々が、舞台に上がることができるのか？今回のアウトサイダーライブも、その「ライブ」の意味が、「舞台」であれば、それは特別な人の特別な場所でしかないように思っていた。そうした中で望んだ今回のワークショップであったが、疑問が見事に解決した。そして、実際自分もワークショップに参加してみて、体を使うと、こんなにも人と人の交感が比較的簡単にできてしまうことにとっても驚いた。身体の不思議というか。同時に、参加していた障害のある人の存在感に感動した。ひとたび動き出



すとそこでは、障害があることがむしろ舞台上に上がる資格を与えられたかのように、生き生きと動き出す。何も持たない「私」は、最後の本番にはとても恥ずかしくて参加できない。「ワークショップ1回1回が本番」と北村氏が言うように、体の真にある魂に触れることによって、表現が生まれていく現場が実際ここで展開されていた。そしてその時、障害があることがむしろ、その輝きをより高度に光らせる技となる（技になるように見える）。障害のある人が舞台上に上がるということはこういったことであったと本当に腑に落ちた。

今、障害者アートは一種のブームかもしれない。浜松でも市の美術館で、障害施設の名前を冠にした展覧会が行なわれている。障害者というイメージが有利に働きだした証拠でもある。同時に、アートの世界では、障害があるないは関係がない。障害者であろうがなかろうがいいものはいい。むしろ障害とかアウトサイドといったくくりがわずらわしい。「障害だから」ではなく、障害を一つの個性として、いいものはいいと、どこまで表出していけるかは、サポートする我々の課題であり、力量でもある。

現在私たちの団体が行なっている、「たけし文化センター」はひとりの重度の知的



障害のある子ども「たけし」の視点を通して、さまざまな基準を作っている。公共施設は往々にして「誰でも利用できる」といいながら、「汚してはいけない、騒いではいけない、人に迷惑をかけてはいけない」という暗黙のルールがあり、ここがバリアとなって実際行くことのできない人たち(子どもや障害のある人など)は結構いる。たけし文化センターでは、「たけし基準であるがゆえに、「壊してもいい、騒いでもいい、人に迷惑をかけてもいい」場となる。しかし実際、

そんなに無法地帯にはならない。それは、「汚したら片付ければいい、騒いだら、人に迷惑をかけたなら謝ればいい」というルールが自然と成立するからである。お互いがコミュニケーションを持つきっかけがなければ人はつながらないし理解もできない。そこに積極的に関わる場を作ろうとしているのがたけし文化センターである。障害のある人を基軸に据えることで、障害のある人の新しい捉え方、対社会との関わり方を示す例とはなった。

がんじがらめで生きづらい人が多くなってしまった今の世の中で、一般的な価値観を変えていく試みが本当に求められている。そのなかで、障害のある人と社会をつなぐ我々は、もっと真摯に、彼らに向きあっていかなければいけないと思う。



久保田翠

NPO法人クリエイティブサポートレッツ理事長、静岡大学農学部非常勤講師

東京藝術大学大学院環境デザイン科終了後、設計事務所で、都市計画、環境デザインを手がける。障害のある子どもの誕生を機に、障害のある子どもたちの表現活動をサポートするクリエイティブサポートレッツを設立。

障害という特徴を個性に変える活動を展開。

#### NPO法人クリエイティブサポートレッツ

2000より、ハンディのある子どもたちの表現活動をサポートする講座を実施。その他、障害のある人や子どもたちの存在を多くの人たちに伝えるための、展覧会、ワークショップ、コンサートなど多数実施。2008年より、障害のある人を基軸とした「たけし文化センター」を起草。2009年に実験事業開始。2010年4月より福祉施設「アルスノヴァ」と、「たけし文化センター」を設立。

NPO法人クリエイティブサポート・レッツ

〒432-8061

浜松市西区入野町8923-4 TEL/FAX 053-440-3176

福祉施設 アルス・ノヴァ

TEL/FAX 053-440-3175

Email [lets-arsnova@nifty.com](mailto:lets-arsnova@nifty.com)

URL <http://homepage2.nifty.com/lets-arsnova/>

## 「アートというツールで支援のいない場をつくってみよう」

### ワークショップ&ライブ 体験コラムその2

山本佳美（NPO法人ちばMDエコネット 事務局長）

「ワークショップ」と聞くと、皆さんはどんなイメージや経験があるでしょうか？私は、自分が運営するカフェ「ひなたぼっこ」で初めて障害のある人とない人が一緒に行ったワークショップが忘れられません。それは、現代アーティストの門脇篤さんをお呼びして、コミュニティアート・ふなばしが企画したものでした。地元の船橋市本町通り商店街で行うNPOとの協働のイベントで、商店街を葉っぱで飾ろうというもの。商店主に葉っぱの原型を作ってもらい、その型をもとに参加NPOのメンバーが画用紙で葉っぱを作って商店街に飾るのです。私は、障害のある人とない人が一緒にワークショップをすることで、障害のある人のことを少しでも知ってもらえたらいいなと思い、ぜひカフェでワークショップをやって欲しいとお願いしました。そして、そこで私の想定外のことが次々と起こりました。障害のあるスタッフが、働いている時には見せないひょうきんな一面やこだわりを見せるのです。直人さんは、カフェで接客をする時にはなかなか声を出さない男の子。しかし、その時は葉っぱにメッセージを書く場面で、自分の好きなサスペンスドラマのタイトルを書き、「犯人はTさんです」と、初対面だった参加者の一人の名前を書き出したのです。それで全員大爆笑。彼は得意そうな顔でニコニコしていました。そして、次の日から「いらっしやいませ！」と大きな声で言うようになったのです。私は、あのワークショップがきっかけで、彼の中で何かが変わった」と感じました。そして、そこに参加した人同士で障害というものに対して新たな見方や関わり方が生まれたのではないか、と思うのです。プロの人が真剣に取り組むワークショップというのは、絵であれ、音楽であれ、ダンスであれ、表現活動を通して障害の有無に関係なく参加者の心や体に何らかの影響を与えるものだ、と確信しました。



絵であれ、音楽であれ、ダンスであれ、表現活動を通して障害の有無に関係なく参加者の心や体に何らかの影響を与えるものだ、と確信しました。

そんな経験を経て参加した、今回の2つのワークショップと発表の場。私自身、初めて出会う障害のある人と一緒に紙芝居作りやらダンスをするという経験は未知そのもの。かなり緊張していました。一方、参加した障害のある人の中には、ナビゲーターである林加奈さんと北村成美さんがこれまで行っていたワークショップの経験者も多く、会場入りし



そんな経験を経て参加した、今回の2つのワークショップと発表の場。私自身、初めて出会う障害のある人と一緒に紙芝居作りやらダンスをするという経験は未知そのもの。かなり緊張していました。一方、参加した障害のある人の中には、ナビゲーターである林加奈さんと北村成美さんがこれまで行っていたワークショップの経験者も多く、会場入りし

た時から慣れた様子でした。でも、彼らにとっても二つのワークショップを最終的にドッキングさせて、一つの作品を創るといのは初体験。一体どんなものになるのか、誰にも分からないというのが正直なところだったのではないのでしょうか。

実際にワークショップに参加してみた感想は…。「障害のある人たちの創造力と、意識の高さに圧倒された」の一言。林加奈さんのワークショップ、めくるめく紙芝居では、ある男の子の隣で絵を描かせてもらいました。その男の子は、どんどん絵を描いていきます。時々、私が描いている絵も気にしてくれていたようです。私が彼と一枚の画用紙を使って何か作りたいと話したら、カットしたものをお互いの絵に貼り付けたり…。自然とつながっていたのですが、彼の中に迷いは見られませんでした。

続いてのワークショップは、北村さんの「毎日が本番です」という言葉どおり、全身を使った真剣勝負。障害のあるなしに関係なく、二人でペアになって腕をつかんで踊ることは、相手の動きや心に耳を傾けなければ絶対に出来ないこと。ふわっと柔らかい感じで回転する女性もいれば、常にアップテンポで動く男性がいたり。車椅子の人と踊る時には、その姿勢を保ちながら、相手の動きを読み取る難しさを感じ…。改めて、一人一人の障害と向き合うことと、それを尊重する大切さを肌で感じた一時でした。そして、参加している障害のある人たちには、それが既に自然と身につけていることに大きな感動を覚えました。



そして、発表の日。そこで私にとっては衝撃の出来事が起こりました。それまで車椅子に乗っていた女性が、発表の時は車椅子から降りると言うのです。日頃彼女に接している山之内さんは「そうか、じゃあ発表の直前に車椅子をよけるから。」と話しています。そして、その日入院していて来られなかったという、いつも付き添ってくれる施設職員の人に電話で「これから本番だから頑張る」と連絡。そのプロ意識に圧倒されてしまいました。

発表の場は、障害のあるなしに関係なく、それぞれが舞台に立って自分の精一杯の表現をすることに集中していたと思います。そんなエネルギーが舞台にはみなぎっていました。

こういった障害のある人の表現活動の場を創り出すには、どうしても支援する人が必要です。例えばダンスであれば、ダンサーとしての体の大切さを気遣いながら支援をすること。

今回のワークショップでは、そんな関係性が自然と生まれている現場を体験することができました。この試みが各地に広がっていくことが、障害のある人のライブ活動の可能性と、日常生活の豊かさを創っていく基本なのだと思います。

カフェ「ひなたぼっこ」では、現在、障害のある人の音楽活動を行っています。ずっとドラムを習っていたダウン症の晶生さんを中心に一昨年「おひさまバンド」を結成しました、カフェでの演奏の他、昨年はカフェから一歩外に出て、商店街や地域の高齢者施設などでも演奏するようになりました。街の中でさまざまな人が表現活動を

することが出来る場所として、これからも地域に根付いた活動を続けて行きたいと思っています。

山本佳美（やまもとよしみ）

NPO法人ちばMDエコネット事務局長、NPO法人コミュニティアート・ふなばしスタッフ

ちばMDエコネットで、コミュニティカフェ立ち上げの中心メンバーとなる。カフェでは、2002年から約2年間、コミュニティアート・ふなばしで月1回「cafe-3-」（音楽、ダンス、トークなど様々な表現とコミュニケーションの場づくり）を企画・運営。

障害のある人が地域で暮らすためには、地元の人との繋がりが重要だと考え、福祉・環境・まちづくり・アート等のNPO、商店街、農家とのネットワーク作りを進めている。

NPO法人ちばMDエコネット

障害のある人もない人も共に暮らしやすい「ノーマライゼーション社会の実現」を目指して1996年に活動を開始。グラウンドワーク活動に取り組み、船橋市の公園清掃や、遊休農地を活用した農園作りを行う。その様子と知的障害のある若者の普通高校での生活を描いたドキュメンタリー映画「ひなたぼっこ」を製作し、全国約100箇所上映。2002年にコミュニティカフェ〈ひなたぼっこ〉の運営を開始し、2007年からは千葉県と協働で、障害のあるお子さんや発達につまずきのあるお子さんの学校支援事業を実施している。2009年には障害者しごと支援事業を立ち上げ、障害のある人の多様な社会参加の道を創るための活動に取り組んでいる。

NPO法人ちばMDエコネット

〒273-0005

千葉県船橋市本町4-31-23

TEL&FAX : 047-426-8825

MAIL : [sun@mdeconet.jp](mailto:sun@mdeconet.jp)

URL : <http://mdeconet.jp/>

## まとめ

今回、厚生労働省の助成を受けて実施した「障害のある人の実演芸術パフォーマンスに関する調査研究事業」では、京都橘大教授の小暮宣雄氏を座長に障害のある人の様々な表現活動について調査研究を行いました。

この研究のベースには、最近注目を集めている障害当事者の表現活動としてのアート活動とその作品の評価の高まりがあります。一昨年、全国3カ所の巡回展「アールブリュット交差する魂展」そして同時期に開催されたスイス・ローザンヌでの「JAPON」展は、約1年に渡る長期展示会として国内にとどまらず、海外でも高い評価を受けました。

一方で、施設や学校などを中心に取り組みられている身体を使った表現活動も盛んに行われています。これらの活動は、教育的活動や療育的活動など指導・教育の一環としての活動が主でありながら一方で地域や身近な集団で自主的な活動を繰り広げている活動も注目されます。今回行った調査では、そのような地域に根ざした活動について、近畿圏に限定はしましたが、調査が行えて実態の一端が見えてきたことは大きな成果であったと思います。特に、セミプロを含め、様々な表現活動のプロが関わっている活動が多かったことが注目されます。

これまで障害のある人に対する限定的なイメージから、裾野の広い人の関わりと彼らの持つ特異（得意）な表現が、多くの人々の関わりを生んでいるということに可能性を感じました。

今回の調査では、それらの活動の一端に触れたにとどまると思いますが、地域で様々な活動を行っている方々への活動の広がりにも寄与できたと感じています。

この報告書が、皆さんの活動の充実に少しでも役立てばと願っています。

平成22年3月末

研究事務局：社会福祉法人オープンスペースれがーと  
副理事長 牛谷 正人

# 付録資料

## 障害のある人のライブ系表現活動に関する調査

### <調査への協力のお願ひ>

私たちは、今年度厚生労働省の助成を受けて、「障害のある人のパフォーミングアーツ(実演芸術活動)に関する調査・研究事業」に取り組んでいます。この事業の一環として、教育・福祉現場や地域サークルなどで取り組まれているライブ系の「表現活動」(※注)の現状を調査することと致しました。

障害のある人の表現活動として、近年、その絵画・造形活動が関心を集め、一昨年には、スイス・ローザンヌの美術館「アールブリュットコレクション」において1年半に及ぶ展覧会が行われるなど、評価が高まってきています。

一方で、学校や施設などでは、演劇、音楽・ダンス(舞踊)はじめ、ライブ系の表現活動も盛んです。今回の調査では、療育・余暇活動や行事の一環として取り組まれている、これらのライブ系の「表現活動」についてお伺いするものです。

次ページの調査票に、必要事項をご記入いただき、ファクスでご返信いただければ幸いです。年末・年始の慌ただしい時期ですが、1月15日(金)を目処にご返信いただきますようお願いいたします。

なお、年度末には、今回の調査を含む研究報告書を作成いたします。

ご回答いただいた皆様に送付し御礼に替えさせていただきます。

2009年12月

平成21年度障害者保健福祉推進事業  
「障害のある人のパフォーミングアーツに関する調査・研究事業」  
座長 小暮 宣雄

### ※注 ライブ系の「表現活動」とは

一般に、表現活動は、ビジュアル系とライブ系、そしてことば系(文学、書道)に分かれます。障害のある人の「表現活動」においても同じような分類をすることができますが、いままでは、特に、絵画・造形などのビジュアル系の表現(=視覚芸術)分野のものに注目が集まり、近年では広く展覧会や図録などで紹介されてきました。

他方、障害のある人の、音楽・演劇・舞踊(ダンス)などのライブ系の「表現活動」(=実演芸術・パフォーミングアーツ)の方は、その場における「ライブ」性ゆえに記録されることがあまり行われず、その実態がよくわからず、また、どのように取り組むといいのか、という政策的な議論があまりなされていませんでした。そのため、今回、その実態を調査しようとしております。

なお、この調査においては、ライブ系の「表現活動」を「アウトサイダーライブ」という用語を使い、ビジュアル系の「表現活動」を「アウトサイダーアート」で呼ぶことにしております。また、「アウトサイダーアート」と「アウトサイダーライブ」をあわせて呼ぶときは、「アウトサイダーアーツ」とし、さらに、現代美術の領域で「パフォーマンスアート」と呼ばれているような境界線上のライブ的な「表現活動」も広く「アウトサイダーライブ」の一つとしていただきたいと思います。

### <調査・問い合わせ先>

社会福祉法人オープンスペースれがーと 事業担当者:牛谷正人  
〒520-3202 滋賀県湖南市西峰町1-1  
TEL/0748-75-7182 FAX/0748-75-7183

回答者所属・氏名・連絡先:

1. あなたは、障害のある人の表現活動全般について関心をもっていますか？

持っている 持っていない

2. あなたの学校・施設・関係する地域の団体で障害のある人のライブ系表現活動を行っていますか？(該当する項目を○で囲んでください)

はい いいえ

※はいとお答えいただいた方は、以下の問いにお答えください。

①それは、どんなジャンルの活動ですか？(複数回答可)

演劇系 音楽系 ダンス(舞踊)系 伝統芸能系  
その他( )

②それらは、どのような位置づけでとられていてますか？(分野をまたがった複数回答可)

主に教育分野 療育活動として 教育・指導として 課外活動として  
主に施設福祉分野 指導の一環として 余暇活動・余暇支援として  
主に社協(地域)分野 地域(サークル)活動として 地域イベントとして  
その他( )

3. 活動の状況を教えてください。

①活動の状況

・活動の頻度は？( )  
・参加者は？( )  
・発表の機会がありますか？( )

②外部の人が関わっていますか？(複数回答可)

専門の表現者が参加している 参加者を広く求めている 外部の人との関わりはない  
その他( )

③活動の資金について(複数回答可)

施設(学校)事業費 助成金・補助金 寄付 参加費  
その他( )

4. 団体・活動のプロフィールについて教えてください。

名称:

所在地:

連絡先:

代表者:

メンバー(構成):

設立目的・経過 (書ききれない場合は、用紙を足してください。又は資料を送付ください)

さらに、詳しい調査(ヒアリング等)をお願いする場合、ご協力いただけますか？

はい いいえ

番号	団体名		府県
1	今林の里		大阪府
2	無記入		
3	兵庫県立北はりま特別支援学校		兵庫県
4	伊丹市立障害者デイサービスセンター		兵庫県
5	社会福祉法人ヘレンケラー財団 太平学園	スニーカーズ	大阪府
6	社会福祉法人ミルクィウェイ	ミルクィバンド	大阪府
7	社会福祉法人天王福祉会 第2茨木学園	響	大阪府
8	社会福祉法人天王福祉会 茨木学園		大阪府
9	里の風	劇団「ドロップ」	大阪府
10	社会福祉法人ゆうとおん	ゆうとおんバンド	大阪府
11	社会福祉法人 堺市社会福祉協議会		大阪府
12	豊中市立おおぞら園		大阪府
13	NPO法人エクスクラメーション・スタイル		京都府
14	宮津サンホーム		京都府
15	乙訓若竹苑		京都府
16	社会福祉法人万葉荘園 あおば寮	万葉風神太鼓	奈良県
17	滋賀県立近江学園	音楽ワークショップ	滋賀県
18	瑞穂		滋賀県
19	草津市社会福祉協議会		滋賀県
20	東近江地域障害者生活支援センターみんなの家		滋賀県
21	社会福祉法人障友会 うららのお店	クリッド	大阪府
22	地域生活総合支援センターおんど		大阪府
23	ミュージックセラピー夢コロラ (垂水区社会福祉協議会)	プレゼントガーデン・アンクルンオーケストラ	兵庫県
24	社会福祉法人産経新聞厚生事業団 なごみ苑		大阪府
25	たけのこ園		奈良県
26	特定非営利活動法人いずみの会 フレンズ		大阪府
27	第3共働舎花の会		大阪府
28	フローラなんだん		兵庫県
29	社会福祉法人みつみ福祉会 ききょうの杜		京都府
30	地域生活支援センター光		大阪府
31	社会福祉法人みんななかま		京都府
32	社会福祉法人スミヤ和佐福祉工場		和歌山県
33	つじやま作業所		大阪府
34	社会福祉法人百丈山合掌会 (パコダの丘作業所合掌園)		大阪府
35	地域支援事業所ぱれっと		兵庫県
36	玉津むつみの家		兵庫県
37	社会福祉法人以和貴会 ワークサポートセンター今人		奈良県
38	永价		大阪府
39	モーツァルト七瀬川つつみ		京都府
40	障害者就労支援事業ピースフルリンク		京都府
41	若草工房		大阪府
42	ハピネスさつま		兵庫県
43	NPO法人ヒマワリホーム		大阪府

番号	団体名		府県
44	多機能型事業所さくら		滋賀県
45	フレアイサギョウシヨ		和歌山県
46	社会福祉法人若竹会 ワークステーションわかたけ		滋賀県
47	社会福祉法人大淀町社会福祉協議会		奈良県
48	山ざる組ちっぷり		大阪府
49	あすなろ製作所		大阪府
50	無記入		
51	日之出障害者会館		大阪府
52	就労継続支援事業所 きょうどう		京都府
53	社会福祉法人未来波「きっと」		大阪府
54	社会福祉法人加島友愛会 かしま障害者センターむつみ		大阪府
55	社会福祉法人明星福祉会 芝生事業所		大阪府
56	障害者活動センター 赤おに		大阪府
57	社会福祉法人よさのうみ福祉会 ゆうゆう作業所		京都府
58	デイサービスセンター満ぶく		和歌山県
59	彩食キッチンBon		奈良県
60	社会福祉法人愛光園		大阪府
61	社会福祉法人ゼノの村 ワークスペースきゃんぱす		兵庫県
62	社会福祉法人ほっこり福祉会 ほっこりの里		大阪府
63	社会福祉法人 そうそうの杜		大阪府
64	社会福祉法人すいせい ワークス垂水		兵庫県
65	つばさ		大阪府
66	御杖村保健福祉課		奈良県
67	紀美野町社会福祉協議会 紀美野町総合福祉センター		和歌山県
68	YELLOW		大阪府
69	里仁館身体障害者デイサービスセンター		大阪府
70	かたつむり共同作業所		和歌山県
71	なるたき		京都府
72	作業所宇宙		大阪府
73	粉浜作業指導所		大阪府
74	すさみ町社会福祉協議会 ふれあい園		和歌山県
75	立雲の郷		和歌山県
76	信楽通勤寮OB劇団		滋賀県
77	社会福祉法人にぎやか会 ポプリン		滋賀県
78	大津市知的障害児地域生活支援センター	打楽器ワークショップ	滋賀県
79	さくらはうす		滋賀県
80	止揚学園		滋賀県
81	NPO法人ウッディ伊香立		滋賀県
82	社会福祉法人おおつ福祉会 唐崎やよい作業所	アトリエ地空	滋賀県
83	滋賀大学教育学部附属特別支援学校		滋賀県
84	滋賀県立三雲養護学校高等部		滋賀県
85	特定非営利活動法人陽だまり 共同作業所陽だまり	(文芸コミケ)み～んな	滋賀県
86	障害福祉施設 大地		滋賀県

番号	団体名		府県
87	NPO法人大阪港あゆみ福祉会 あゆみ作業所		大阪府
88	さわらび作業所	劇団「ふりいだむ」	滋賀県
89	社会福祉法人まいばらし社会福祉協議会 ほおずき作業所		滋賀県
90	滋賀県立甲南高等養護学校		滋賀県
91	滋賀県立野洲養護学校	ドンマイ音楽サークル	滋賀県
92	滋賀県立野洲養護学校	かっきーず	滋賀県
93	ステップあっぷ21		滋賀県
94	まちかどプロジェクト	まちプロ座	滋賀県
95	ふくらの森	あっぱれふくらっこ	滋賀県
96	滋賀県立信楽学園		滋賀県
97	湖南ホームタウン		滋賀県
98	工房和楽		滋賀県
99	高島市社会福祉協議会		滋賀県
100	社会福祉法人パレット・ミル 多機能型事業所 パワフル		滋賀県
101	社会福祉法人パレット・ミル 自立就労センター パレット・ミル		滋賀県
102	社会福祉法人 和福祉会		滋賀県
103	特定非営利活動法人コスモス会 コスモス共同作業所		滋賀県
104	島のぞみの家作業所		滋賀県
105	クリエートプラザ東近江		滋賀県
106	社会福祉法人かすみ会 つばきはらファクトリー		滋賀県
107	社会福祉法人もろどう会 あじさい園		滋賀県
108	社会福祉法人栗東市社会福祉協議会		滋賀県
109	社会福祉法人和光会 みのり園		滋賀県
110	社会福祉法人やまなみ会 やまなみ工房		滋賀県
111	社会福祉法人やまびこ福祉会 やまびこ作業所		滋賀県
112	社会福祉法人湖北会 ワークスさかた		滋賀県
113	スマイル（あゆみ作業所）		滋賀県
114	近江八幡市社会福祉協議会		滋賀県
115	わたむきの里 支援センター太陽		滋賀県
116	りんごの樹		滋賀県
117	社会福祉法人ゆたか会 清湖園		滋賀県
118	NPO法人淡海湖西会 マキノばら園作業所		滋賀県
119	特定非営利活動法人stand. コミュニティひろば もみの木		滋賀県
120	甲賀福祉作業所		滋賀県
121	ほわいとクラブ		滋賀県
122	社会福祉法人宇治東福祉会 デイセンター宇治作業所	宇治作業所仲間の会	京都府
123	京都市やましな学園		京都府
124	京都太陽の家	命輝け第九コンサート	京都府
125	宇治川福祉の園		京都府
126	社団法人京都手をつなぐ育成会 伏見工房		京都府
127	槇島福祉の園 ジョブサポートセンターマキシマ	なないろ	京都府
128	京都市立北総合支援学校		京都府
129	社会福祉法人信和福祉会 圭の家		京都府

番号	団体名		府県
130	障がい者生活支援センターやまびこ		京都府
131	やましの里	(株)JEUGIA	京都府
132	京北やまぐにの郷		京都府
133	上京ワークハウス		京都府
134	社会福祉法人南山城学園	障害者ダンス教室アンダー	京都府
135	産経新聞厚生事業団 すみれ工房		京都府
136	みずなぎ高野学園		京都府
137	社会福祉法人みずなぎ学園 みずなぎ丸田学園		京都府
138	社会福祉法人あらくさ福祉会 障害福祉センターあらくさ		京都府
139	社会福祉法人みやこ みやこ西院作業所		京都府
140	社会福祉法人西陣会 デイセンターふらっと		京都府
141	京都市だいが学園		京都府
142	精華地域活動センター「心」		京都府
143	障害者就労支援センターほっとはあと		京都府
144	社会福祉法人京都身体障害者福祉センター 京都市いたはし学園		京都府
145	社会福祉法人京都総合福祉協会 生活介護事業所「すずかけ」		京都府
146	相楽作業所		京都府
147	京都府立桃山養護学校		京都府
148	和束町社会福祉協議会		京都府
149	宮津与謝聴覚言語障害者地域活動支援センター		京都府
150	重度障害者通所施設 じゅらく		京都府
151	特定非営利活動法人京都フォーライフ		京都府
152	京都市紫野障害者授産所		京都府
153	大阪府立砂川厚生福祉センターこんごう寮		大阪府
154	大阪府立砂川厚生福祉センターつばさ		大阪府
155	社会福祉法人産経新聞文化事業団 こすもす		大阪府
156	旭区社会福祉協議会 ボランティアビューロ	サークル“アイ”	大阪府
157	堺あけぼの園		大阪府
158	社会福祉法人フォレスト福祉会 障害福祉サービス 風の森		大阪府
159	社会福祉法人大阪市手をつなぐ育成会 支援センター中		大阪府
160	大阪市立浅香障害者会館	スマイルエンジェル	大阪府
161	大阪市社会福祉協議会大阪市ボランティア情報センター	DOREMI DE PEACE	大阪府
162	NPO法人さをりひろば SAORI hands	キンキ雑楽団	大阪府
163	ういずサポートセンター守口		大阪府
164	社会福祉法人こころ福祉会 作業所あいと摂津市手をつなぐ親の会		大阪府
165	特定非営利活動法人だんでらいおん		大阪府
166	大阪府立吹田支援学校高等部		大阪府
167	通所授産施設 みらい		大阪府
168	岸和田障害者共同作業所	なかまバンド	大阪府
169	社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 支援センターさくら	春をよぶみんなのコンサート	大阪府
170	高石障害者作業所		大阪府
171	大阪府立泉北高等支援学校		大阪府
172	社会福祉法人障友会 デイセンターフレンズ		大阪府

番号	団体名		府県
173	大阪府立豊中支援学校	豊中D.D.D.クラブ	大阪府
174	大阪市東成区社会福祉協議会		大阪府
175	泉南作業所	南中ソーラン 踊り隊	大阪府
176	高井田障害者センター		大阪府
177	福島区社会福祉協議会	①手話コーラスグループはづき②ドリーム	大阪府
178	八尾市立障害者総合福祉センター	ヒップホップダンス教室「レジェンド・キッズ」	大阪府
179	ピュアあすなろ		大阪府
180	社会福祉法人みどりの里 身体障害者療護施設みどりの里	春をよぶみんなのコンサート	大阪府
181	社会福祉法人風媒花 キッチンはな		大阪府
182	水仙福祉会 風の子そだち園		大阪府
183	知的障害者入所更生施設 ハニカム		大阪府
184	社会福祉法人愛生会 豊生園		大阪府
185	地域活動支援センター ちのくらぶ	ちのちのクラブ	大阪府
186	社会福祉法人日本ヘレンケラー財団 阪南市立まつのき園	パインツリー	大阪府
187	社会福祉法人八尾すずらん福祉会 ワーク・すずらん		大阪府
188	社会福祉法人きぼうの会 田園きぼうの作業所		大阪府
189	大阪府立砂川厚生福祉センター いぶき		大阪府
190	箕面市立障害者福祉センター ささゆり園		大阪府
191	吹田つながりの場はるにれ		大阪府
192	ヴァンサンクの郷		大阪府
193	社会福祉法人島本福祉会 作業所わくわく		京都府
194	NPO法人ダ・カー歩		大阪府
195	ふりーすぺーすSUN		大阪府
196	大阪府立富田林支援学校		大阪府
197	生活介護 ほっとステーション しどろもどろ		大阪府
198	社会福祉法人藤井寺市社会福祉協議会		大阪府
199	社会福祉法人つむぎ福祉会 青年の自立支援センターゆう		大阪府
200	豊中市立みずほ園		大阪府
201	社会福祉法人四条畷福祉会 津の辺		大阪府
202	社会福祉法人清光会 恵誠の里		大阪府
203	寝屋川市社会福祉協議会		大阪府
204	社会福祉法人北摂杉の子会 高槻地域生活総合支援センターぷれいすBe		大阪府
205	社会福祉法人八尾ひまわり福祉会 ワークスペースあすく		大阪府
206	(個人)大阪ワークスセンター		大阪府
207	特定非営利活動法人ほほえみ		大阪府
208	財団法人箕面障害者事業団 箕面市障害者雇用支援センター		大阪府
209	社会福祉法人日本ヘレンケラー財団 生活介護「一丁目」		大阪府
210	社会福祉法人日本ライトハウス		大阪府
211	マイウェイひらかたワーク草笛		大阪府
212	岸和田光生療護園		大阪府
213	社会福祉法人花の会 第2共働舎花の会		大阪府
214	クリエイトしき		大阪府
215	大阪市港区社会福祉協議会		大阪府

番号	団体名		府県
216	NPO法人さかえ会 生活介護事業所フォーーク		大阪府
217	東福六万寺		大阪府
218	西成区社会福祉協議会		大阪府
219	社会福祉法人一羊会 武庫川すずかけ作業所		兵庫県
220	神戸市立青陽須磨支援学校	ダンスサークルスリーナイン	兵庫県
221	ななくさ新生園		兵庫県
222	とよおか作業所 郷・とーぶ		兵庫県
223	社会福祉法人兵庫県社会福祉事業団 赤穂精華園	華輝(はなのかがやき)	兵庫県
224	社会福祉法人兵庫県社会福祉事業団 赤穂精華園	権現やんちゃ太鼓	兵庫県
225	宝塚市立養護学校	あんだんて・りんがーず	兵庫県
226	特定非営利活動法人白ゆり会 地域活動支援センターなかよし工房	紙芝居・人形劇クラブ「スマイル」	兵庫県
227	ゆうかり作業所	コロポックル	兵庫県
228	三恵園	楽団「ポケット」コーラスグループ「ジャスティス」	兵庫県
229	障がいしゃ倶楽部コスモヒルズ		兵庫県
230	個性の作業所 七つの海	タッピークラブ	兵庫県
231	兵庫県立西はりま特別支援学校		兵庫県
232	猪名川園		兵庫県
233	伊丹市立障害者福祉センター		兵庫県
234	社会福祉法人神戸市灘区社会福祉協議会		兵庫県
235	社会福祉法人祉友会 障害者支援施設 リバティ神戸		兵庫県
236	えんぴつの家	もとまちハートミュージアム実行委員会	兵庫県
237	兵庫県立神戸聴覚特別支援学校		兵庫県
238	社会福祉法人姫路潮会 めかちゃん福祉作業所		兵庫県
239	兵庫県社会福祉事業団総合リハビリテーションセンター 自立生活訓練センター		兵庫県
240	社会福祉法人兵庫県社会福祉事業団 五色精光園 成人寮		兵庫県
241	加東市社会福祉協議会		兵庫県
242	社会福祉法人福成会 清流園		兵庫県
243	伊丹市立障害者福祉センター アイ愛センター		兵庫県
244	社会福祉法人とよおか福祉会 とよおか作業所 愛・とーぶ		兵庫県
245	つつじの家ひおか工房		兵庫県
246	朝日ノ里		兵庫県
247	沢谷荘		兵庫県
248	社会福祉法人ゆめさき会 ゆめさきの家	楽団「花夢」	兵庫県
249	みどり荘	民謡サークル	兵庫県
250	社会福祉法人中播いちかわ園		兵庫県
251	特定非営利活動法人ファミリーファーム 麦わら帽子		兵庫県
252	社会福祉法人あかりの家 障害者支援施設あかりの家		兵庫県
253	オープンファクトリー		兵庫県
254	社会福祉法人兵庫県社会福祉事業団 五色精光園 多機能型事業所かがやき		兵庫県
255	西宮市立西宮養護学校		兵庫県
256	社会福祉法人神戸あゆみの会 喜楽舎		兵庫県
257	社会福祉法人神戸市中央区社会福祉協議会	ハートでアートこうべ実行委員会	兵庫県
258	小野市立小野特別支援学校		兵庫県

番号	団体名		府県
259	社会福祉法人相生市社会福祉協議会		兵庫県
260	withくれよん		兵庫県
261	あゆみの里 友喜舎		兵庫県
262	CILひめじ りぷるす		兵庫県
263	社会福祉法人一羊会 すずかけ第2作業所		兵庫県
264	新生会作業所		兵庫県
265	大地の家		兵庫県
266	特定非営利活動法人神戸障害者自立支援福祉協会		兵庫県
267	社会福祉法人芦屋市社会福祉協議会		兵庫県
268	姫路市立かしのきの里		兵庫県
269	宝塚さざんかの家		兵庫県
270	神戸市立垂水養護学校		兵庫県
271	社会福祉法人メイクるタウン		奈良県
272	宝山寺福祉事業団 梅寿荘デイセンター		奈良県
273	上牧町社会福祉協議会	考える会「遊びに行こう」	奈良県
274	社会福祉法人ならやま会		奈良県
275	奈良東養護学校		奈良県
276	生活介護事業まーぶる		奈良県
277	特定非営利活動法人リハビリティーほっかつ 河合町福祉作業所		奈良県
278	ひまわり学園真美が丘自立訓練校		奈良県
279	奈良県手をつなぐ育成会		奈良県
280	テクノパークぶろぼのアルファ		奈良県
281	社会福祉法人桜井市社会福祉協議会		奈良県
282	和歌山県立紀伊コスモス支援学校	夢コスモス	和歌山県
283	社会福祉法人一麦会 麦の郷和歌山生活支援センター	かなで	和歌山県
284	和歌山県立中紀福祉センター 由良みのり園	芸能部	和歌山県
285	和歌山県立紀北支援学校 中学部		和歌山県
286	社会福祉法人一麦会 麦の郷 岩出地域生活支援センター	けいじん舎 アンブリアル	和歌山県
287	社会福祉法人つばさ福祉会 エコ工房四季		和歌山県
288	のぞみ園	ハッピーズ	和歌山県
289	社会福祉法人芳春会 ウイズ	アートのわ民参加グループ	和歌山県
290	社会福祉法人大塔あすなろ会 ささゆり作業所	あすなろ楽団	和歌山県
291	社会福祉法人大塔あすなろ会 あすなろ木守の郷	あすなろ楽団	和歌山県
292	若葉作業所		和歌山県
293	社会福祉法人和歌山県福祉事業団 古座あさかぜ園		和歌山県
294	なかよし作業所		和歌山県
295	和歌山県立南紀支援学校		和歌山県
296	社会福祉法人かがやき神戸 ぐりいと		兵庫県
297	社会福祉法人恩鳥福祉会 ポプラの家		兵庫県
298	社会福祉法人あみの福祉会 だるまハウス		京都府
299	社会福祉法人亀岡福祉会 デイセンターぼれぼれ		京都府
300	NPO法人はっち		兵庫県
301	京都府立ろう学校 中学部		京都府

番号	団体名		府県
302	社会福祉法人東大阪市社会福祉協議会		大阪府
303	社会福祉法人阪神福祉事業団 ななくさ清光園		兵庫県
304	滋賀県立草津養護学校	音楽部	滋賀県
305	びわこ学園医療福祉センター草津		滋賀県
306	社会福祉法人あゆみの会 オープンスペースAYUMI		奈良県
307	宮津共同作業所 すまいる		京都府
308	青い鳥工房		大阪府
309	奈良県立奈良養護学校 整肢園分校		奈良県
310	滋賀県立むれやま荘	日本舞踊サークル	滋賀県
311	大阪市育成会地域生活支援センター	ぼるとサークル	大阪府
312	プレゼント・ガーデン アンクルン・オーケストラ		兵庫県
313	特定非営利活動法人あいとう和楽		滋賀県
314	社会福祉法人豊中キララ福祉会 きらら作業所		大阪府
315	社会福祉法人心境荘園		奈良県
316	社会福祉法人松花苑 みずのき		京都府
317	ワークセンター紫香楽		滋賀県
318	社会福祉法人太陽福祉会 太陽作業所		京都府
319	社会福祉法人つむぎ福祉会 そらまめ作業所	つむぎジョイフル	大阪府
320			









番号	団体名	1 あり1 なし2	2 はい1 いいえ 2	2-① 演劇	2-② 音楽	2-③ ダンス	2-④ 伝統芸 能	2-② 療育	2-② 教育指 導	2-② 課外	2-② 指導	2-② 余暇	2-② サークル	2-② イベント	3-① 発表 ある1 ない2	3-② 専門家	3-② 参加者	3-② 外部	3-③ 事業費	3-③ 助成金	3-③ 寄付	3-③ 参加費
149	宮津与謝聴覚言語障害者地域活動支援センター	1	2																			
150	重度障害者通所施設 じゅらく	1	2																			
151	特定非営利活動法人京都フォーライフ	1	2																			
152	京都市紫野障害者授産所	2	2																			
153	大阪府立砂川厚生福祉センターこんごう寮	1	1		1							1			1	1			1			
154	大阪府立砂川厚生福祉センターつばさ	1	1		1					1		1			1	1			1			
155	社会福祉法人産経新聞文化事業団 こすもす	1	1		1	1				1		1			2	1			1			
156	旭区社会福祉協議会 ボランティアビューロ	1	1			1							1		1		1			1		1
157	堺あけぼの園	1	1		1							1			1	1			1			
158	社会福祉法人フォレスト福祉会 障害福祉サービス 風の森	1	1		1	1		1						1	1	1			1			
159	社会福祉法人大阪市手をつなぐ育成会 支援センター中	1	1												1	1			1			
160	大阪市立浅香障害者会館	1	1			1							1		1	1						1
161	大阪市社会福祉協議会大阪市ボランティア情報センター	1	1	1	1	1						1		1	1	1	1	1	1	1	1	1
162	NPO法人さをりひろば SAORI hands	1	1		1						1				1	1			1	1		1
163	ういずサポートセンター守口	1	1			1							1					1				
164	社会福祉法人こころ福祉会 作業所あいと摂津市手をつなぐ親の会	1	1			1	1				1				1	1			1	1	1	1
165	特定非営利活動法人だんでらいおん	1	1		1			1				1			1	1			1			
166	大阪府立吹田支援学校高等部	1	1	1	1					1					1			1	1			
167	通所授産施設 みらい	1	1		1	1						1			1	1			1	1		
168	岸和田障害者共同作業所	1	1		1						1	1		1	1	1	1					
169	社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 支援センターさくら	1	1		1							1			1		1		1			1
170	高石障害者作業所	1	1			1									2	1			1			
171	大阪府立泉北高等支援学校	1	1	1	1	1			1	1					1			1	1			
172	社会福祉法人障友会 デイセンターフレンズ	1			1			1			1				1	1			1			
173	大阪府立豊中支援学校	1	1	1	1	1			1	1				1	1		1		1	1		
174	大阪市東成区社会福祉協議会	1	1		1									1								
175	泉南作業所	1	1			1						1			1				1			
176	高井田障害者センター	1	1						1		1	1	1		1	1	1		1			
177	福島区社会福祉協議会	1	1		1									1	1							
178	八尾市立障害者総合福祉センター	1	1			1				1		1	1		1	1			1			
179	ピュアあすなろ	1	1		1	1						1			2	1			1			
180	社会福祉法人みどりの里 身体障害者療護施設みどりの里	1	1		1		1					1			1				1			
181	社会福祉法人風媒花 キッチンはな	1	1		1		1					1			1	1				1		
182	水仙福祉会 風の子そだち園	1	1		1	1	1	1		1		1		1	1	1			1	1		1
183	知的障害者入所更生施設 ハニカム	1	1		1							1			1			1				1
184	社会福祉法人愛生会 豊生園	1			1							1			2	1			1			
185	地域活動支援センター ちのくらぶ	1	1		1				1					1	1				1			

番号	団体名	1 あり1 なし2	2 はい1 いいえ 2	2-① 演劇	2-② 音楽	2-③ ダンス	2-④ 伝統芸 能	2-② 療育	2-② 教育指 導	2-② 課外	2-② 指導	2-② 余暇	2-② サークル	2-② イベント	3-① 発表 ある1 ない2	3-② 専門家	3-② 参加者	3-② 外部	3-③ 事業費	3-③ 助成金	3-③ 寄付	3-③ 参加費
186	社会福祉法人日本ヘレンケラー財団 阪南市立まつのき園	1	1		1										1			1	1			
187	社会福祉法人八尾すずらん福祉会 ワーク・すずらん	1	1		1					1			1		1	1				1		
188	社会福祉法人きぼうの会 田園きぼうの作業所	1	1		1			1				1			1	1			1			
189	大阪府立砂川厚生福祉センター いぶき	1	2																			
190	箕面市立障害者福祉センター ささゆり園	1	2																			
191	吹田つながりの場はるにれ	1	2																			
192	ヴァンサンクの郷	1	2																			
193	社会福祉法人島本福祉会 作業所わくわく	1	2																			
194	NPO法人ダ・カー歩	1	2																			
195	ふりーすぺーすSUN	1	2																			
196	大阪府立富田林支援学校	1	2																			
197	生活介護 ほっとステーション しどろもどろ	1	2															1	1		1	
198	社会福祉法人藤井寺市社会福祉協議会	1	2																			
199	社会福祉法人つむぎ福祉会 青年の自立支援センターゆう	1	2																			
200	豊中市立みずほ園	1	2																			
201	社会福祉法人四条畷福祉会 津の辺	1	2																			
202	社会福祉法人清光会 恵誠の里	1	2																			
203	寝屋川市社会福祉協議会	1	2																			
204	社会福祉法人北摂杉の子会 高槻地域生活総合支援センターぶれいすBe	1	2																			
205	社会福祉法人八尾ひまわり福祉会 ワークスペースあすく	1	2																			
206	(個人)大阪ワークセンター	1	2		1										2							
207	特定非営利活動法人ほほえみ	1	2								1		1	1	1			1	1			
208	財団法人箕面障害者事業団 箕面市障害者雇用支援センター	1	2																			
209	社会福祉法人日本ヘレンケラー財団 生活介護「一丁目」	1	2												2			1	1			1
210	社会福祉法人日本ライトハウス	1	2																			
211	マイウェイひらかたワーク草笛	1	2																			
212	岸和田光生療護園	1	2																			
213	社会福祉法人花の会 第2共働舎花の会	1	2																			
214	クリエイトしき		2																			
215	大阪市港区社会福祉協議会	2	2																			
216	NPO法人さかえ会 生活介護事業所フォーーク	2	2																			
217	東福六万寺	2	2									1			1			1	1			
218	西成区社会福祉協議会																					
219	社会福祉法人一羊会 武庫川すずかけ作業所	1	1			1		1			1	1			2	1			1			
220	神戸市立青陽須磨支援学校	1	1			1						1			2	1						1
221	ななくさ新生園	1	1		1							1			1				1			
222	とよおか作業所 郷・と一ふ	1	1			1								1	1		1		1			



番号	団体名	1 あり1 なし2	2 はい1 いいえ 2	2-① 演劇	2-② 音楽	2-③ ダンス	2-④ 伝統芸 能	2-② 療育	2-② 教育指 導	2-② 課外	2-② 指導	2-② 余暇	2-② サークル	2-② イベント	3-① 発表 ある1 ない2	3-② 専門家	3-② 参加者	3-② 外部	3-③ 事業費	3-③ 助成金	3-③ 寄付	3-③ 参加費
260	withくれよん	1	2																			
261	あゆみの里 友喜舎	1	2																			
262	CILひめじ りぶるす	1	2																			
263	社会福祉法人一羊会 すずかけ第2作業所	1	2																			
264	新生会作業所	1	2																			
265	大地の家	1	2																			
266	特定非営利活動法人神戸障害者自立支援福祉協会	1	2																			
267	社会福祉法人芦屋市社会福祉協議会		2																			
268	姫路市立かしのきの里	2	2																			
269	宝塚さざんかの家		2												2		1		1			
270	神戸市立垂水養護学校	2	2																			
271	社会福祉法人メイクるタウン	1	1		1							1			1			1	1			
272	宝山寺福祉事業団 梅寿荘デイセンター	1	1		1			1				1										
273	上牧町社会福祉協議会	1	1									1		1	1	1						1
274	社会福祉法人ならやま会	1	1		1			1				1			2			1	1			
275	奈良東養護学校	1	1		1	1			1						1			1				
276	生活介護事業まーぶる	1	1		1							1			1	1				1		
277	特定非営利活動法人リバティーほっかつ 河合町福祉作業所	1	2																			
278	ひまわり学園真美が丘自立訓練校	1	2																			
279	奈良県手をつなぐ育成会	1	2																			
280	テクノパークぷろぼのアルファ	2	2																			
281	社会福祉法人桜井市社会福祉協議会	2	2																			
282	和歌山県立紀伊コスモス支援学校	1	1			1			1	1					1					1		
283	社会福祉法人一麦会 麦の郷和歌山生活支援センター	1	1		1							1			2			1				
284	和歌山県立中紀福祉センター 由良みのり園	1	1		1	1		1				1		1	1			1				
285	和歌山県立紀北支援学校 中学部	1	1		1				1						1			1				
286	社会福祉法人一麦会 麦の郷 岩出地域生活支援センター	1	1		1							1			1	1				1		
287	社会福祉法人つばさ福祉会 エコ工房四季	1	1									1			2	1				1		
288	のぞみ園	1	1		1							1			1							
289	社会福祉法人芳春会 ウイズ	1	1									1			1							
290	社会福祉法人大塔あすなろ会 ささゆり作業所	1	1		1							1			1			1	1	1		1
291	社会福祉法人大塔あすなろ会 あすなろ木守の郷	1	1		1					1		1		1	1					1		
292	若葉作業所	2	2																			
293	社会福祉法人和歌山県福祉事業団 古座あさかぜ園	1	2																			
294	なかよし作業所	1	2																			
295	和歌山県立南紀支援学校	1	2																			
296	社会福祉法人かがやき神戸 ぐりいと	1	1	1							1				1	1	1		1	1	1	



2-⑤どんなジャンルの活動ですか その他
和太鼓の演奏
今後、定期的に行っていく予定
20分程度の創作劇
コンテンポラリーダンスワークショップ
視覚芸術
文芸
ダンス系は手話パフォーマンス、音楽はカラオケ程度
コーラス・和太鼓
絵画
ことば系
太鼓
自主製品(さをり)
表現というよりは体を動かすために_____体操をしている
アートセラピー活動、織物(ており)
コーラス活動
ハンドベル
音楽に合わせて手話をしている
工芸・書道・絵画等の作品展
ファッションショー
手話歌
エアロビクス
絵画
クラウン(道化師ピエロ)
よさこい踊り、太鼓、マラソン
陶芸活動
ソーラン節

2-②どのような位置づけで取り組まれていますか その他
障害者が自己表現を通して自己実現できることを目的としてプロ化を目指す
利用者が興味を持ち、取り組みやすい文化活動として
行うとすれば「地域活動として」今は設立2年の事業所なので、ゆくゆくはメンバーの活動場として考えている
設定活動
表現者の気の向くままに
学校としてではなく個人が自主的な活動として取り組んでいる

学校としてではなく個人が自主的な活動として取り組んでいる
人権学習の講演として当事者本人たちの障害者問題の見直しなどの劇
音楽療法として活動する者と歌・楽器を演奏する者
自己表現方法の1つとして
働く喜びと目標達成感や役立ち感を体験してもらう
NPO法人で循環プロジェクト、他に個人パフォーマンス
楽しんで体を動かす目的
音楽活動の一環として
地域の障害者のアート作品を販売する「アートショップグリーンるうぷ」を市内公共施設内で通年営業、同ショップで月1回イベントを開催
地域との交流目的
施設行事
関連施設の発表会で何度か見ているが詳細は不明、ライブに相当するかどうか難しいところ
仕事として
社会参加を意識した「サークル活動」として取り組み
日中活動の一環として

3-①頻度
月2回
学校行事・授業として年3回、その他年2回
クラブ活動月2回(スポーツ系・芸術系・園芸系・リラクゼーション系の4クラブ)
2ヶ月に1回くらい
練習年に3回、発表はこれまでに2回のみ
週1回、約1時間
週1回、または随時
通し稽古週2回(1時間半/1回)、毎日発声練習
月2回
週1回 半日
年20回
月1~2回
月1~2回
週1回(音楽)、月2回(エアロビ・ダンス)
月2回
月1回
スポット参加あり
年1回

年3回
毎年5～3月に月1～2回
月1回
年1回
本人次第
歌週1～2回、ダンス年数回
授業としては週1回
発表会前・月2回
1～2ヶ月に1回
月2回
週1～2日
週2回
年に数回
歌・ダンス:週1回
発表時の練習くらい
月2回 40分ほど
週1回
週1～数回
毎週月曜日、月4回
月1回 半日
週2回
月～金の10～16時
月1回
年間20ヶ所以上、他に10か所
月2回
週1回
週1回
週3回
週1回
週2回
年1回の活動の為に2ヶ月練習
数か月に1度
年に1度の発表会に向けて演劇活動を実施
月3回
毎月
不定期

ほぼ毎日
年1～2回
週1回
月2回
月2～3回
年10回
週3～4回
年数回
週1回
年5～10回
週1回
月1回
週1回
たまに
年1回
月2回
月1回 2時間
月1回
週1回
年2～3回
年7～8回
週3回
月2回
月1～4回
月2回
週1回
週1回
週1回
和太鼓部:週3回、和太鼓クラブ:週1回
行事ごと
月1～2回
年1回
月1回
年1回
発表機会に合わせて
年1回

音楽系:月5回、ダンス系:月6回
年1~2回
行事の2週間ほど前
月2~3回
年2~3回
月1~2回
月2回
月2回
年4回
月2回
体育の授業として10時間程度
年1回
週2~3回
機会ごとに
月1回
月1回
週1回~月1回
月1回
週2回
2ヶ月に1回
イベント時
和太鼓演奏を年間通して授業で取り組み
月3~4回
週1回
月2回
年1回
月2回
行事に合わせて
年30回の講演
月1~2回
月1回 音楽・運動・創作・卓球バレー・華道サークル
授業として週2時間
クラブ活動として週1~2回
月1回
週1回
授業として週1回

月2回
月1回
月2回
毎日午前・午後1回ずつ
1ヶ月に1回
音楽活動一週一回、体育系一月一回、舞踊一月一回
毎週
週1回くらい
週1回の練習

3-① 活動の状況 参加者	
職員3名、参加者7～8名	
在校生や有志	
7名／1クラブ	
施設入所者、グループホーム入居者、在宅児童のグループ	
4～5名	
18名	
利用者	
劇団ドロップの座員19名	
基本的に全員参加	
利用者18名	
20名の児童	
少数～全体	
7～8名	
20名	
知的障害者・青年～成人20名	
知的障害成人	
通所者、家族、職員	
利用者11名、他事業所利用者、計60名くらい	
10名	
本人が歌い、職員が支援	
市内在住の小・中・高校生、通所者	
9名	
述べ60名	
2名	
全員	

劇・小中学生、音楽・中高生、ダンス・中高生
6名
日課
昨年9月に始まったばかり
年2回
年1回の文化祭発表
月1回
月1回
月2回
劇・月2～3回、ライブ・手話パフォ・月1～2回
週1回
年1回
週1回
2週に半日
定期的な取り組みはない
不定期 年5回
月2回
2年に1回、隔年ごとに随時
月1回
年に数回
月1回
週2回 部活動として
年1～2回
月3回
2ヶ月に1回、職員の時間が確保できた時
5～8名、職員2～3名
利用者
全員
16～18名
2名
通所の重度知的障害者20名ほど
10名
10名
7名
10名弱
全員

10名
28名、2回に分けて練習
利用者10名
利用者の約2/3
知的障害者
20名
1名～多数
7名+ダンサー8名ほど
知的障害者
利用者全員
全員
10名
50名
6～9名
20名
知的障害者
全員
全員
在校生と卒業生
10～15名
地域の障害者
障害のある人とボランティア
15名
20名
10名
30名
5～20名
エレクトーンの演奏が好きな利用者
知的・身体障害者
1～15名
利用者4名、職員2名
利用者、職員、ボランティア
利用者
1～2名
利用者、支援員
利用者10名

10名
80名
6～7名
地域住民
利用者、職員 述べ150人
利用者、職員
10～20名
5～10名
20～25名
楽団8名、コーラス10名
通所利用者
利用者
和太鼓部:高等部7名、和太鼓クラブ:中学部7名・高等部4名
20名
10～20名
10団体くらい
利用者10名、職員数名
児童・生徒
全員
日中活動利用者
30～35名
手帳所持者等
ダンス1名、音楽7名
市内の障害者
地域住民
25～30名
10名
15名
10名
20名
高等部生徒
神戸市内在住・在勤・在学の障害者
20名
ほぼ全員
利用登録のある知的障害者
希望者40名

全員
30名
60～150名
5名
20名
生徒
メンバー、職員
10名弱
11名
利用者
利用者、スタッフ
利用者、職員
15名
利用者
60名
10名
生徒
高等部生数名
入所者12名、職員8名、ボランティア1～2名の参加時あり
30名
3名
利用者
15名
30名
利用者・職員
利用者
利用者
15～20名
支援学校の児童・生徒
1施設で10人程度

3-① 活動の状況 発表 記述欄	
年1回、障害者フェスティバル他	
部門によって差あり、地域の催し・施設の行事等	
したいとは考えている	
年1回の音楽会にて発表	

当園主催の音楽会、大阪府障害者芸術文化フェスタ、共に生きるコンサート、春咲きコンサート
年間4～5回
年2～3回
過去は年に1～2回あったが、ここ3～4年はなし(発表できる状況にない)
糸賀音楽祭、園内行事
年3～4回
H19.7に開所、パフォーミングアーツに関する情報が乏しく、逆に祭りやライブがある際に情報を頂ければありがたい
年1回の文化祭
年1回、障害の方が集まる活動で手話や踊りを行っている
信楽学園の演劇発表展に参加
11月、糸賀一雄記念賞音楽祭
そば店を経営しているのでm店舗全体とアートで考えたい
地域ぐるみの祭りでのステージ発表
劇・校内発表会や市の発表会、音楽・校内文化祭、ダンス・校内運動会
エイサー大会、校内行事(終業式・文化祭)
2回
年2～3回、地域の祭りなど
5～10分程度の発表
文化祭
よかよかまつり
プレーメンライブ、サマースクール等
糸賀一雄音楽祭
小・中・高・大学や地域公民館、イベントなど
全利用者・職員
20～25名
20名前後
障害のある方、職員、行政、ボランティア、近隣住民(少数)
生徒
20～30名
3名
15～20名
劇・15名、ライブ・手話パフォ・10名
利用者
利用者
音楽療法・25名、バンド活動・2～4名

10名
10名
述べ15名
利用者5名ほど、職員1名
100～200名
利用者全員
利用者全員
利用者の内希望者、OB、地域サークル員
高等部自主通生(バンド部)
通所メンバー全員
1名
施設行事
市の作業所発表会
出展(販売)が発表の機会かと思われる
年2～3回
年間20ヶ所以上、他に10か所
年1回の単独ライブ、他10回ほどのライブ
年1回、必ず発表するわけではない
施設行事
年3～4回
後援会主催のコンサート、施設行事
地域の事業所が集まって発表するコンサート
保護者・関係者に向けて1回
年1回
近隣中学校の文化祭・体育祭、施設行事
地域の施設を借りての作品展
地域イベント
市のパレード、地域の祭り、施設行事
春を呼ぶみんなのコンサート(年2回)
地域のイベント
地域・法人のイベント
年数回のイベント
年5回
年数回、市内のイベント参加、不定期で他施設を訪問
年1回
年2回

障害者の集い
施設行事
基本的にはないが、展覧会などの際、代表メンバーがプロと組んで発表する場合あり
学校祭に参加希望中
音楽療法士による実践発表
年7～8回
月1回
校内行事、バリアフリーコンサート
いきいきサロン、幼稚園等
地域のイベント
施設や保育所への慰問
地域のイベント年12回、神戸市内のホールその他野外イベント会
和太鼓部のみ、祭り等で発表
施設行事、他施設との交流会
年1回
原田の森ギャラリー
施設行事
年1回
施設行事
地区障害者協会の文化祭、施設行事
県芸術文化祭
施設行事、障害施設の発表会
行事に合わせて
施設行事
施設行事
地域祭、音楽療法コンサート
地域イベント、施設行事
あるが少ない
法人内の各施設イベント
年によっては運動会で、他は授業のまとめとして
絵画等の公募作品展
今のところ内部活動中
時々発表の機会がある
テーマにより都度考える
来年度より行事として設ける予定、昨年までは奈良の春咲コンサートに出演
学部内行事

法人イベント、市内コンサート
年7回
今年度中にあればいいなと思っている
地域イベント
年3回
年1回
年5回ほど発表
月2回 地域イベント、老人ホーム等の慰問
文化祭、フェスタ等
年1回施設の発表会、年30回のイベント公演、静岡大道芸ワールドカップに出場
施設内発表、外部との交流会
年数回、サークルごとに
地域イベント
校内発表会、2009年度近畿音楽教育研究大会・京都大会に研究演奏として出演
県福祉センター夏祭り、校内行事
施設行事年1回
年1～2回
県内のコンテストに参加したことがある
指導ボランティアの定期発表会、地域の福祉施設訪問、施設行事
区のイベント
地域交流活動内で年3～4回
障害者団体・地域等とのコラボイベント
イベントや行事において
学校の発表会や地域のイベント
平均して2ヶ月に1回程度

3-② 活動の状況 外部の人が関わっていますか その他
過去に音楽ボランティアとしてお世話になっていたグループがあったが、今は職員が支援
以前は大正琴・ギターの講師に師事していたが、講師体調不良のため、現在は師事していない
今年度より専門家の指導を仰ぐが、指導者体調の関係で最近では職員のみで指導
手話のできる方に教えて頂いている
1回は施設職員、残り1回は音楽ワークショップの流れで専門スタッフ
元八日市養護学校教職員が支援
元甲良養護学校教員が支援
ボランティアで参加していただいている
表現者は主に利用者だが、観劇は一般に案内している

音楽療法士による活動と職員・利用者のバンド活動
大学生がボランティアで教えてくれている
定例としては関わっていない
ボランティアで関わっている一部の人たち
アートで大学と一緒に活動しているので、ライブアートに取り組む予定あり
個人活動も多数(年間20ヶ所以上)
立ち上げ時は専門家が参加、今は職員が指導
一緒に踊ることがある
ボランティア
指導して頂き一緒に体を動かす程度で、自分たちで表現できている段階ではない
ボランティア
友人つながり
音楽療法士の関わり
職員・利用者への技術指導を定期的に専門家に依頼
制作・練習には参加者はないが、他グループとの交流も行っている
ボランティアとして参加してもらっているが、主に職員が行っている
卒業生の参加の場合あり
ダンスの指導を受ける場合もある
年数回
施設主催の発表会
年2回
昨年1度余暇的に車イスダンスに取り組む
すべて発表形式
今年度11月に行事で発表
2年に1回、京都市コンサートホール、その他
地域の小学校の学習発表会
福祉イベント、音楽祭
学校祭文化の部、ふくふくフェスタ、3年生を送る会
年1～2回
年1回
市内ブロックの仲間の交流会
過去には外部での発表機会があったが、現在は施設内のみ
うたごえまつり、作業所主催の映画会
年1～2回
年に何度か
地域のイベントに年5回ほど、施設行事

施設内行事
年1～2回
クリスマス会・新年会等の行事
希望者が地域や施設行事で発表、年数回
年2回のパーティー、年2回のブラインドダンス競技会、ビッグ・アイ

3-③ 活動の状況 活動の資金について その他
セルフヘルプグループとして行っているので活動費は自費
和太鼓の道具は助成金によって購入
特別に資金としてはない
本人と作業所で負担
グッズを販売
自費
特になし
主催者側の経費
なし
後援会の事業費
資金は必要なし
依頼主からの謝礼
なし
特になし
なし
資金はなく衣装などは個人負担の場合あり、移動は公用車
オリジナルTシャツの販売収入を活動費とする
なし
日中活動訓練支援としての位置づけですが、特別な資金準備等はない、ボランティアの交通費を含み自費負担の状態
イベントに参加して少額の出演料有り。

厚生労働省 平成21年度障害者保健福祉推進事業  
障害のある人の実演芸術「パフォーミングアーツ」に関する調査研究事業  
活動報告書

発行 社会福祉法人オープンスペースれがーと  
〒520-0189 滋賀県湖南市西峰町1-1  
TEL 0748-75-7182 FAX 0748-75-7183